

絶対正義の兄が斬る！

もちふじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

帝国の副将軍、ミラルド・ユビキタス。

彼は帝国最強の将軍、エスデスに唯一意見出来る人物であり、そして――。

――重度のシスコンである。

セリユー大好きなお兄ちゃんが、セリユーを死なせまいと頑張る話です。

目次

人生は苦すぎる	1
ミラルドという男	3
兄と妹	6
仮面の下	12
空虚な心と血濡れの帝具	16
変人達の会合	19
狩人達	25
初任務の内容は	34
帝国最強の恋愛事情	39
激情のカルボナーラ	52
行き過ぎたシスコン野郎	61
幸せな牢獄	67

人生は苦すぎる

——それは絶対に避けたかった選択で。でも、大切なものを守るにはそれしかなくて。妥協に妥協をかさねたうえで考えてみて、それでもやっぱり嫌で。しかしながら、もうそうする他道はなく。

そんな風に考えながら、嫌々に、本当に嫌々に、『帝国軍』に入隊した。

家庭に母親というものが存在せず、唯一の父すら既に他界。十代だった当時の自分が、自身と食べ盛りの妹を養っていくのは正直言って不可能だった。

せめて父親が少しの貯金でもしていたら良かったのだが、社会的に見て『悪い』大人に分類されるであろう父に、期待しろというほうが無理な話だ。

悩みに悩んだ結果、思い浮かんだ職業は『軍人』だった。

帝国軍には年齢制限がなく、尚且つ従順で使える者には多額の給料を払う。幼少期を森で過ごしたため、最強とは言えずとも、ある程度腕には自信があった俺にとっては充分すぎるほど、魅力的な職業だった。

…ある一点を除いては。

危険な職業とは百も承知。仕方がない事だと思し、死ぬこと自体は俺にとつてさほどの問題ではない。

では何が問題なのか。

——妹と会える時間が減ることだ。

可愛い妹が「お兄ちゃん、わたし寂しいよ」と泣いてしまうではないか。いや妹は泣き顔もパーフェクトに可愛いが。

考えぬいた結果、やはり軍へ入隊。可愛い妹と会えなくなるのは確かに悲しいが、その妹を守るためにも金は必要だ。

幸いにも、軍には近衛兵というものがあるし、そこに入れば余程の事がない限り帝都を離れることはないだろう。

しかし、ここから予想外の展開が続く。

何の因果か、この世に四八しかない兵器『帝具』に適応してしまい。「守るより攻めるほうが向いているだろう」と、近衛兵ではなく同期のエスデスが率いる隊に入れられ。

最前線でバツバツサと人を殺しているため、革命を目論む連中のブラックリスト入りを果たし。

想像以上にやんちゃであった妹は、何を考えたのか、俺が留守にしている間に帝都警備隊に入隊。その後、なんと帝具を手に入れ。

それをきっかけに初めての兄妹喧嘩。

そうそう上手くはいかないものだ、と二十を過ぎて漸く気がついた。

「あー。早くセリユーに会いたい…」

「…？何か言いましたか？ミラルド副将」

「…いや、何でもない」

そんなこんなで、気づいたら帝国軍の副将軍にまでなっていた。それも、所属は帝国最強の攻撃力とまで言われるエスデス軍で。

——人生甘くないとは分かっているつもりだが、これは些か苦すぎる仕打ちではないだろうか。

ミラルドという男

——帝国軍において、もつと言うならばエスデス軍において、ミラルド・ユビキタスという男は極めて異端な存在だった。

まず何がおかしいって、戦いを好まない。これだけで戦闘狂の集まりとも言える、エスデス軍では信じられない事である。

いつだって彼は味方の兵が、相手をいたぶる様子を遠目から眺め、制止を促すこともそれに嬉々として参加することもしない。ただ、不気味なまでの無表情でぼんやりと遠くを見ているだけだ。

が、しかし。彼が善良な人間であるかと聞かれれば、そういう訳でもない。そもそもの話、まともな精神を持った者は今の腐りきった帝国で副將軍になんてなれやしないだろう。つまり帝国に仕えている時点で、彼も頭のネジが数本行方を眩ませてしまっているのだ。

生き埋めをしろと言われれば、泣きじゃくる赤子も平気で穴へ突き落とすし、惨い見せしめをしろと言われ、敵兵の骨を一本ずつ金槌で砕いたことだってある。

そこまでは普通だ。

否、普通ではないのだが、あの軍では普通でないことが普通なのだ。異常なのは、彼がその全てを作業の様にこなしていることである。嫌悪に顔を歪めるでもなく、恍惚の笑みをうかべるでもなく、淡々とそれがあたりまえのように。

実際、人を痛めつけることで、喜びを感じるタイプのエスデス軍では物凄く浮いている。

もつとも、だからといって彼が軍で疎まれた存在かと言われると、そんなこともない。

むしろ逆だ。

これが意外と尊敬されているのである。不思議なことに。

つまりは、

「あんなことを顔色一つ変えずに行うなんて・・・流石すぎる・・・」
「ミラルドさんまじかっけえ！」

という意見である。

ごく稀に、

「踏みたい・・・」

こんなふうになたな扉を開く者もいるが、まあ今話す内容でもあるまい。

まとめると、ミラルド・ユビキタスは意外にも部下から好かれていたのである。

■ ■ ■ ■ ■
「ミィラきーン。なにしてんですかあ」

場所は北の異民族、要塞都市。

足下に広がる、ポツカリと空いた大きな穴。中には顔に絶望の色を塗りたくった、大量の人々。青年は近くに腰を下ろし、それらを見下ろす。

ふいに後ろから聞き覚えのある声に名を呼ばれ、ミラルドはゆったりと顔を上げる。

声の主は、金髪の小柄な少年。『三獣士』と呼ばれ、ミラルドとともにエスデス軍で敬われている三人のうちの一人だ。

「見てる」

「いやだから、何をですか」

いつものことではあるのだが、説明が足りない。何かを見ていることくらい分かっている。何を見ているか聞いているのだ。

ミラルドは少年の顔を見ないまま、少しだけ詳しく答えることにする。

「生き埋めをしろと言われただろう。だから、ここにいたら根性のある奴は登って来るかと」

「ふうん。それで？登って来たんですか？」

「一人」

「アハハ、命知らず」

表情筋がいつさい動かないミラルドとは違い、少年はケタケタと愉快そうに笑う。ミラルドには何が楽しいのか理解できない。

「どうしたんですか、そいつ」

「予想以上に頑張るから、腕ごと切り落とした」

「おおー！さすがあー！」

チラリ、と横目で見るとパチパチと手を叩き、過剰な反応をする少年がいる。やはり、ミラルドには何が楽しいのか理解できなかった。

「副将ー、探しましたけど、やっぱり生き残りはもういないっすわ」

兵士に声掛けられたため、ミラルドは少年——、ニャウとの会話を一旦止めて立ち上がる。

「そうか。じゃあもう埋めてしまおう。エスデスは？」

「向こうで、北の勇者と遊んでます。副将の指示でやっていいそうです」

彼女が勝手な上司なのは、もはや今更なので気にする必要はない。

これから行うのは、北の異民族の生き埋め処刑。地面に穴をあけ、民は大方そこへ落としている。

後は、もうひたすら土を被せるだけだ。

流石に人の手でやるのは骨が折れるので、調教した危険種を使うが。

その場は他の兵士に任せると、ミラルドはエスデスを呼びに行く。

北の異民族の討伐も終わったことだし、帝都に帰れる。

即ち、妹に会える。

「兄ちゃん、もうすぐ帰れるよ。セリユー」

帝国最強の一角が、帝都へ帰還する。

吉と出るか、凶と出るか、まだ誰にも分からない。

兄と妹

「はああああああ」

広々とした地下の実験室。鉄製の冷たい机に突っ伏した少女の、やけに大きく、そして深い溜め息が響く。

笑えばさぞ愛らしい顔をするであろう彼女は、ひどく陰鬱な雰囲気纏っている。端的に言えば、顔が死んでいる。

いつもならば、後頭部で結ばれている明るい茶色の髪は机の上に散らばっており、琥珀色の瞳には光がない。口は間抜けにも、溜め息をついた状態で空きっぱなしだ。

少女の名前は、セリユー・ユビキタス。帝都警備隊に所属する、少々ブロンクン気味の帝具使いである。

「はあああ」

無意識のうちに再び、大きな溜め息を一つ。溜め息をつくると幸せが逃げると言うが、それが本当ならば今セリユーの周囲には、沢山の幸せが漂っているだろう。出血大サービスである。

セリユーは焦点の合わない双眸を宙に向け、やっとの思いで声を絞り出した。

「…………お兄ちゃんが…………足りない」

その言葉に側にいた白衣の男性、通称『Dr. スタイリッシュ』は思わず顔を引き攣らせる。

とある事情により、両腕を失ったセリユーに義手をつくったスタイリッシュは、アフターケアということで警備隊の地下に来ていた。

彼は科学者であると同時に医者でもあるのだが、これは相当重症だ。自分では手に負えない。

「はあああ」

「…………ちよつとセリユー。溜め息ばかりつかないで頂戴。こつちまで気分が暗くなるじゃない」

普段の彼女なら、ここで元気よく「すみません、ドクター！」と、謝

るはずなのだが、生憎今セリユーは兄欠乏症によって正気ではない。

自分の恩人であるスタイリツシュにも、容赦なく噛み付いた。

「ドクターもおかしいと思いませんか!?・・・そりやあ確かに仕事で北に行くとは聞きましたよ！聞きましたけど!?でもまさか、その次の日に出て行くとは思わないじゃないですか！」

長い髪を振り乱し喚き散らすセリユーは、どんどんヒートアップしていき、しまいには顔を赤くして地団駄を踏みだす。

思わず、机を握りしめた拳で叩いてしまう。金属の机と、同じく金属の義手が全力でぶつかり合い、甲高い音が鳴る。

やり場のない怒りを物にぶつけた形だ。

怒りでスタイリツシュの存在すら忘れていそうな彼女に、彼は「まさか」と、ある一つの仮説を立てる。

「・・・もしかしてだけど、セリユー知らないの?」

「何がですか!？」

「——アンタのお兄さま、今日帝都こっちに帰って来たらしいわよ」

「・・・へ?」

口から零れた様な、意味の無い音がセリユーの驚きを物語っている。まさに、開いた口が塞がらない。

スタイリツシュの言葉を聞き、ゆっくり脳内で噛み砕き、理解し、思考におよそ2秒ほどの時間を使い。

そして、行動に移すまでに約0.3秒——。

「どうしてもっと早く言ってくれないんですかー!!」

セリユー・ユビキタスは地下を飛び出した。

「そりや、ずっと地下に籠って特訓（という名のストレス発散）ばっか

りしてたら・・・俗世間には疎くなるわよねえ・・・」

——感情に任せて、後先考えずに行動してしまうのは、自分の最大の短所だとセリユーは自覚していた。

自覚しているつもりだったが、だからといって改善できるかと言われれば、それはまた別の話である。

そして今回も、その欠点が原因でやらかしたのだった。

「・・・よく考えてみたら、普通に詰所か家で待つてた方が早く会えた気がする」

兄、ミラルドを探し始めてもう20分は経つ。一度家や警備隊の詰所に戻ってみたが、行き違いになったのかミラルドはいなかった。どう考えても、あそこで地下を飛び出してきたのは間違いだったろう。そもそも、彼が外に出ているかすら分からないのだ。

まあ、今更後悔しても全て遅い訳だが。

「お兄ちゃん、腕斬られたって言ったら・・・怒るかなあ。・・・怒るだろうなあ」

自分の失態から意図的に意識を逸らし、溜め息混じりにそう零す。おそらく、セリユーには怒らないだろう。せいぜい無理ばかりして、と眉間に皺をつくる程度だ。

ミラルドが怒るのは、セリユーの両腕を奪った殺し屋『ナイトレイド』のシェーレに対してだ。

セリユー自身も帝具使いであるが、あの日セリユーが遭遇した殺し屋は帝具使いが三人だ。

彼女の帝具が生物型である故、実質二対三に持ち込めたが、それでも不利なことには変わりがない。

結果は惨敗。両腕を犠牲にしたにも関わらず、一人として殺すことが出来ず、自らの力不足を強く感じた。

人数の不利など言い訳には出来ない。なにせ、自分は正義を名乗っているのだから。

応援に駆けつけた同僚達のお陰で、命こそ助かったものの、負けたという事実はセリユーの心に大きな決意を宿らせる。

——人体実験。

科学者であるスタイリツシユに頼み込み、なくなった腕の代わりになるような兵器を義手としてもらった。強くなりたい、ただその一心で。

結果的には彼女の戦闘力は大幅に向上。

ミラルドがセリユーに対して怒るとしたら、ここだ。

危ないことはするな。

無理をするな。

勝てそうにないなら、全力で逃げろ。

これが帝都警備隊に入る時にミラルドと約束した、否、約束させられた条件である。

はて、人体実験は『危ないこと』に入るのだろうか？

「…いやでも今後のことを考えると、強くなっていて損はないし…。むしろ改造した方が生き残れる確率上がるし…。」

顎に手を当て、スラム街をパトロールしつつ呟く。

既に何人か出会った盗人は悪と判断し、断罪。勿論、罪悪感など欠片もない。自分は正義で、間違ったことなど一つとしてしていないのだから。

最も、もはやそんな些細なことは覚えていない。今彼女の脳内を占めているのはただただ、兄の事だけだ。

「お兄ちゃん怒らないといいなあ…。」

「——怒られるようなことをしたのか」

「…うん、まあ…。」

そこで、セリユーはピタリと動きを止める。

独り言のつもりが、気づけば誰かと会話しているのだ。それも、聞き慣れた声と。びっくり、なんてものじゃない。

ぐりんっ、首がねじ切れそうな勢いで後ろを振り返る。

後ろにいたのは一人の青年。

自分と同じ琥珀色の瞳に、焦げ茶色の髪。張り付いたように動かない、感情が読めない無表情。

整った顔立ちも相まって、人形のようなと言われる彼が、自分に接する時だけ僅かに声音が優しくなることを、セリユーは知っている。世界で一人だけの、自分の肉親。

「っ、お兄ちゃん!!」

考えるより先に身体が動き、兄に抱きつく。

勢いをつけて飛びついたにも関わらず、ミラルドはふらつくことなく、しっかりとセリユーを抱き締めた。

「探した。家にも、詰所にも居ないから」

ポンポン、と二回ほどセリユーの頭を撫でるミラルドの胸板に額を押し付ける。

「ふあああ・・・お兄ちゃんの匂いだあ・・・」

「セリユー」

「っふふ、うへへへえ」

「セリユー、落ち着け」

鼻息を荒くして変態チックな笑みを浮かべる妹は、数ヶ月ぶりに見てもやはり可愛い。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃんっ」

「なんだ」

「うふふ」

可愛い。物凄く可愛い。

なんだこの可愛い生物は。本当に人間なのか。

ぎちぎち音が鳴るほど強く抱きつかれていても、文句を言う気にもなれない。

表情には出ないが、そんな思いがミラルドに心を駆け巡り、大洪水を起こした。

「ごめんなさいどうかしてました」

それから、数十分してようやく正気を取り戻したらしいセリユーは、恥ずかしそうに顔赤くして先ほどの奇行を謝罪する。

セリユーは兄のことが異常なまでに好きだが、ここまで変態のような行動に出たのは初めてだ。

今まではせいぜい、ミラルドの洗濯物を隠れて奪って匂いを嗅ぐ程度だったのだから。

「落ち着いたか」

「う、うん」

「そうか。じゃあ、」

彼は一度言葉を区切り、セリユーの腕、つまりは義手を掴んだ。

はっ、と気が付く。手袋で隠していたが、ミラルドに通用する訳がない。それに、あれだけしつかり抱きついたので。

バレた。いずれ知られてしまう事だとはいえ、まだ色々心構えが出来ていない。義手が知られたのなら、人体実験の事も話さなければならぬだろう。

まずい、頭の中で警報が鳴り響く。

冷汗が止まらない。

奥底が冷えきったミラルドの目とセリユーの目が合った。

「——何があったか、兄ちゃんにきちんと説明出来るな？」

仮面の下

北方征伐も終わり、数週間の休暇に入っていたミラルドは上司のエスデスに呼び出され、渋々宮殿へやって来ていた。

將軍、副將軍など軍の幹部に位置する者は宮殿内に自室が用意される。当然ミラルドの部屋もあるにはあるのだが、彼の場合帝都に自宅があり、最愛の妹が自分の帰りを心待ちにしているのでそこは使われていない。

一方、エスデスは宮殿で暮らしており、呼び出す場所は勿論彼女がいる宮殿。

用事があるならお前が俺のもとまで来い、と言いたい気持ちをぐつと堪えて対面の席に腰を下ろした時だった。

感情が表れにくい、ミラルドの目を丸くさせる出来事が伝えられたのは。

「——三獣士が殺された？」

思わず、エスデスの言葉を復唱する。

三獣士といえば、エスデス軍の中軸とまで言われる帝具使いの猛者達だ。

油断や慢心でそう易々と殺される連中ではない。

出来るとしたら、帝都を蔓延る同じ帝具使いの殺し屋達。

奴らは革命軍と繋がっているという噂もある。帝国の帝具使いを殺すことに、なんら不思議はない。

『「ナイトレイド」、か』

「おそらくな。まったく・・・、困った部下共だ。そもそも、お前が素直に行っていればこんなことにはならなかったろうが」

彼女は優雅に紅茶の入ったカップを傾け、軽くミラルドを睨む。それだけで一般の兵なら気絶ものだが、目の前の彼は何処吹く風と涼しい顔をしている。

三獣士に与えた仕事は『大臣に反抗する恐れがある文官殺し』。これは本来、エスデスがミラルドに命じた仕事であった。

それを面倒くさいと断ったミラルドの代わりとして、三獣士が向かったのだ。

まさかそれで死ぬとはミラルドも思っていなかったが。

しかし、困ったことになった。心の中で眉を寄せる。

「・・・俺の仕事が増えるな」

いざという時の、仕事押し付け役がいなくなったのは中々に痛い。こんなことになるぐらいだったら、最初から自分が行けば良かった。部下が死んだというのに顔色一つ変えないあたりがいかにも彼らしい。

「で、だ。三獣士の穴を埋める為に、帝具使いのみの部隊を結成することにした。・・・まあ、ナイトレイドの殲滅が目的だな」

「それで？」

「当然、お前もそこに配属する予定だ」

「・・・だろうな」

一つ溜め息をつく。ナイトレイドの名は有名だが、中でも帝具、村雨の使い手『アカメ』は特に危険視されている。

剣の腕もさることながら、何より問題はその能力。切り傷一つで相手を死に至らすと言われる呪いの刀は、非常に厄介だ。出来ることなら戦いたくはない。

「私がいけないときはミラが指揮を取るんだぞ。しっかりしてくれ」

そう言つて、エスデスは資料の束をミラルドに寄越す。目を通すと、数名の名前と使用する帝具について書かれていた。おそらくは、配属されるメンバーの情報だろう。

一番下まで読み流し、そこで彼は固まったように動きを止めた。

無意識のうちに手に力が入っていたようで、ぐしやりと紙が悲鳴を上げる。

「——エスデス、これはどういう事だ」

資料の一番下に書かれた名前は、間違いなく『セリユー・ユビキタス』であった。

ミラルドの低い声にエスデスは怯えた素振りも見せず、「どうもこうも」とあつげらんと言つてのける。

「お前の妹も、貴重な帝具使いだ。それも生物型。ナイトレイドとの戦いにきつと役に立つだろう」

「・・・ふざけているのか」

「ふざけているように見えるか？」

セリユーをそんな危険な場所に送り込める訳がない、ミラルドの瞳に僅かな殺意が宿つた。エスデスはそれに気付かないふりをして続ける。

「本人も乗り気らしい。安全な鳥籠に閉じ込めておくことが、愛情とは限らないと思うがな」

「・・・お前に、何が分かる」

「分からんな、何も。分かりたいとも思わん」

険悪な雰囲気の流れる。主に生み出しているのはミラルドだが。エスデスはむしろ上機嫌そうに口元に弧を描いている。戦闘狂の彼女にとって、ここで彼が怒って殴りかかってくるならば願つたり叶つたり。

根が温厚、というか面倒くさがりな彼に限って、そんなことはないと思うが。

「そもそも、大臣が決めたことだ。異論は認められん」

「・・・」

「・・・お前も同じ配属だし、多少セリユーを優先する行動は認めよう。何より私がいる。面倒は見てやる」

長い時間黙りこくっていたミラルドは、その言葉に嫌々ではあつたが、了承を示した。

セリユー本人も望んでいた、ということがミラルドの背を押したのだろう。

「話はもう終わりか」

「ああ」

かたん、音を鳴らして椅子から立ち上がり、短く言葉を交わしてから扉へ向かう。そこで彼はドアノブに手を掛けて、思い出したように言う。

「エスデス、一つ頼みがある」

「ほう？言ってみるといい。頼まれてやるかは分からんがな」

首だけで後ろを振り返り、琥珀色の瞳に深い何かがうつる。どこまでも無表情な顔からは何の感情も読めない。

否、何も考えていないのかもしれない。彼にとって、妹以外のことは全てどうでもいいのだから。

「ナイトレイドの『シエーレ』という女は、俺に殺させてくれ」

彼の心を占めるのはたった一人、セリユー・ユビキタスのみ。

——だからこそ、ミラルドは妹を傷つけた者を許さない。

それが何者であろうと。

何を考えていようと。

絶対に。

無表情という仮面の下で、黒い激情が渦巻いていた。

空虚な心と血濡れの帝具

「っはあ、はあ」

——アイツは、マジでやばい。

どれぐらい走ったか。奴はまだ追ってきているのか。部下は何処へ行ったのだ。まさか全滅か？ありえない。何人いたと思っっているんだ。あの数をたつた一人でどうにか出来るはずがない。違う、認める。どうにか出来るから今自分は追われているのだ。痛い。怖い。死にたくない。

何がなんだか、さっぱり理解出来ない。気づいたら血の海で、無我夢中で走り出して来たのだ。

分かることは、奴と自分には天と地程の力の差があるということ。

——そして、捕まったら絶対に殺されるということだ。

「ぜえ、ぜえ……。ここ、まで来れば、もう大丈夫だろ」

大樹に身を隠しつつ、寄りかかる。本音を言えばこのまま倒れ込んでしまいたいが、何処に奴がいるか分からないためそうもいかない。走り過ぎたせいで、肺はズキズキと傷んで口の中は鉄の味がする。乗っていた馬は奴に殺され、途中からはずっと自らの足で逃げてきたのだ。この有様も納得だろう。

それでもかなり長い距離を走った。奴は馬にすら乗っていないかつたし、流石にもう追いつくことは不可能であろう。

そう思うと急激に身体が疲労を訴え始め、糸が切れたように座り込んでしまう。恐怖のあまり気づかなかつたことに、緊張がほぐれ意識が向くようになったのだ。

それが、良くなかった。いや、もうこの時点で何をしようと無駄だったのかもしれない。

逃げられるはずが、無かつたのだ。

「——なんだ。もう走らないのか」

ぞくり。

全身を舌で舐められたような、言葉に出来ない恐怖が身体中を駆け巡った。心臓がはち切れんばかりに、音を鳴らし、頭の何処かで「もう、駄目だ」そう思っていた。

追いつかれた、奴だ。逃げないといけなのに、身体が動かない。膝がガクガクと笑って、滴り落ちるほど汗をかく。息の仕方が分からなくなるような、圧倒的なまでの恐怖。

彼が強いから、怖い訳じゃない。強いだけの人間なら他にも沢山遭遇した事があるし、その度なんとか生き延びてきた。

彼が怖いのは、恐ろしいのは、もっと別の理由だ。

自分は知ってしまった。彼の怖さは強さではない。この怖さを知らないで死んでいった部下達は、ある意味では幸せだったかもしれない。

自分は、帝具を持っている。その名はスペックテッド。五視の能力の中一つ、洞視を使った時に自分は彼の奥底に眠る深い闇に気がついてしまった。

心を読む、それが洞視の能力。

彼の心の中には、何もなかった。

喜びも、悲しみも、憂いも、優越も、同情も、怒りも、嘆きも、幸福も、絶望も、希望も、食欲や睡眠欲さえも。

凡そ感情と呼ぶべきものが、彼の心には一切なかった。

こいつは一体何なんだ。

何を考えているんだ？

まさか本当に何も考えていないのか？

———コレは本当にニンゲンか？

そんな考えを最後に、男の意識は掻き消されるようにきえていった。



首のなくなった男の死体を足でどけ、額に付いている帝具『スペツクテッド』を回収する。これが、今回のミラルドの仕事だ。革命軍の地方チームの皆殺し、これはあくまでオマケに過ぎない。ついでに殺してきて、程度に頼まれた事だ。

ミラルドは本当なら、長い休みに入っているはずなのだが、三獣士が殉職したこともあり尻拭いにこうして働いている。まあ、實際家に居てもセリユーは警備隊の仕事があり家を出ているので、そこまで不満はない。どうせ家に居てもする事など、特にないのだ。

まさかこれが、ワーカーホリックだろうか。

なんてことを考えながら、テキパキと手を動かす。

丸い瞳の形をしたアクセサリーのような帝具は、所有者だった男の血で赤く濡れている。流石にこのまま持ち帰るには抵抗があるので、ハンカチで適当にふいてコートにしまう。ついでに、返り血でべつとりと汚れたミラルドの黒い手袋も外し、放り捨てた。値が張るものではないし、躊躇いはない。

アジトが森にあつたこともあり、死体は放置していても危険種が勝手に美味しく頂いてくれるだろう。

ミラルドは何かを悔いたように悲しそうに、死体を見つめる——
なんてことはなく。仕事が終わった瞬間、コートを翻し一度も振り返ることなくその場から立ち去った。

ナイトレイドが仲間部隊を一つ壊滅されたと聞くのは、この数日後である。

変人達の会合

——老若男女に関わらず、様々な人の足音。主婦の井戸端会議の話し声。商人が荷馬車を引く、ガラガラとした重低音。

それらがてんでバラバラに音を奏でたミュージカル、帝都のメインストリートを表現するとしたら、こんな感じだ。

この悪政の世の中では非常に珍しい余裕のある表情をした者達、端的に言ってしまうえばブルジョアは、活気溢れる帝国の裏側で何が起これり誰がどうなっているのか、全てを知らながら笑ってやり過ごす。

花の都とまで言われた帝国は、千年という長い時間をかけ、順調に腐っていきもはや生き地獄。一部の者を除き、皆が皆生きること必死だというのに。

しかし、だ。この事情を知る者のほとんどは帝都の住人であり、地方の田舎者達は帝都の闇を一切と言っていないほど知らない。

それが良いことか悪いことかは分からないが、地方で重税に苦しみながら生き続けるのと、帝都で家畜のような扱いを受け、犯され殴られ痛めつけられ、死んだように生き続ける奴隷とでは前者のほうがまだマシではないだろうか。

閑話休題。

帝国の中で一際目を引く大きな建物、つまるところの宮殿を遠目から眺める黒髪の青年は、つい先日までは帝国の辺境にある、海軍に所属していた男だ。帝具使いのみの特別警察として帝国から招集され、生まれて初めて都会へとやって来たのである。

だが、帝都の華やかさに多少驚いたものの、彼の心に気後れや田舎者である恥などは少したりとも存在しない。自分の故郷が帝都に負けず劣らず、立派な場所だと自信があるからだ。

服だって彼が持つ中で最も洒落たものを着て来たし、同僚へのお土産として持ってきた海産物も絶品揃いと抜かりは無い。

その服が一昔前に流行ったものであるとか、袋がはちきれんばかりに詰められた大量の鮮魚が田舎臭さに拍車をかけていることとかなんて、彼が知る由もない。

周囲の視線や、自分を見てコソコソとする話し声が僅かに気になるものの、此処で慌てたり挙動不審になつたりしては自分の故郷を陥れることになるやもしれない。故に、彼は胸を張り、堂々と歩く。

青年の名はウェイブ。海賊や海の危険種と戦ってきた、自称『漢の中の漢』。

彼は、心の中で腕を組んでどつしりと構える。言わばこれは、帝都への宣戦布告だ。

悔るなかれ、我は『海の男』なり。些細なことでは取り乱せないと知れ、帝都よ。

——こう宣言した数分後、まさか涙目になりつつこの言葉を撤回する事になるとは、勿論今の彼は知らない。

「——よし——」

宮殿内の会議室のドアの前で、ウェイブは満足げに鼻息を荒くして立ち止まった。

目的地まで迷うこと無く辿り着けた。元より方向音痴という訳でもなかったが、帝都に来たのも、宮殿に入ったのも初めてなのだから、誰の助けもなく自分の力でここまで来れたことは充分称賛に値するだろう。

そんな風に自分で自分を褒めながら、ウェイブは未来の仲間達との遭逢に胸を踊らせた。地元にはいなかった、自分と同じ帝具使いに出会えることは、たとえそれが人殺しの為に集まったと言えど、彼にとって喜ばしいことである。

最初が肝心。舐められてはいけない。

父がそう口を酸っぱくして言っていたのを、ウェイブはよく覚えている。叱りつけるように言っていたが、あれは父なりの応援だったのかもしれない。

ならば、それに応えてみせよう。見ていてくれ、父よ。

「こんにちはー！帝国海軍から来まし——た……」

バン、と音を立てて開けた重たい扉の先にいたのは、予想外にたった一人。綺麗に膝の上で両手を重ねている――、上半身裸の大男だった。

それだけならまだしも、下半身を覆う衣服は拘束着のようで、頭部は顔面も含めて特徴的なマスクに隠されている。さらに、剥き出しの胸には三本の傷跡。時々マスクの隙間から漏れる「…シユコー、…シユコー」という音は恐らく吐息か。

マスクで表情は窺えないが、顔の向きの的に多分ウェイブの方を見ている。ウェイブは拷問官じみた彼にゆっくりと微笑んで返し、

「部屋、間違えちゃいました」

静かに会議室から出ていった。

「は、ははっ。えーと、ここは拷問官の部屋だったかな」

頬を引き攣らせながら、ウェイブはドアの前でしゃがみ込んでなんとか笑顔を作る。

目的地を再度確認するべく、ポケットに入った紙を取り出す。四角く折ったそれをゆっくりと開いて、ウェイブは敢えて声に出して呟いた。

「俺の集合場所は、特別警察会議室ね。特別警察会議室、特別警察会議室」

早口言葉みたいだ、と笑いながら頭上に向ける。

ドアにぶら下がったプレートには間違いなく『特別警察会議室』と彫られていた。

――あっている。

「……ってことはアレが同僚かよ!!」

きょうび海賊だつてもつとマシな格好してるわ、と言いたい気持ちはなんとか抑えて、ウェイブはもう一度静かに入室する。

「ど、どうも」

トコトコと小走り気味に、男から一番離れた斜めの席に座る。

この場においてウェイブが出来ることはただ一つ。彼を刺激しな

い事だ。

そう思つて、絶対に目を合わせないようにしていたのだが、どうにも視線を感じる。この部屋にはウェイブと男しかいないので、見られているのはウェイブで、見ているのは男だろう。

やだ怖い。ウェイブもう帰りたい、パパ。

だが現実には甘くなく、ウェイブの気持ちを他所に加速していく。

「……………」

続いて現れたのは、黒髪黒装束の少女。ウェイブより数歳年下だろうか。

少女はサラサラとしたショートカットの髪を撫でつけて、ウェイブと男を見比べる。そのままとくに何も言わずにウェイブの正面に腰を下ろし、自前のお菓子をモグモグと口に放り込み始めた。

些か愛想が良くないが、例の男よりはまともな人間だろう。腹をくくって彼女に話しかけた。

「お、俺はウェイブっていうんだ。君も招集された帝具使いなんだろう？よろ—」

「このお菓子はあげない」

よろしくな、と最後まで言わせて貰う事すら出来ず、敢え無く轟沈。やはりこの子も変な子だった。

すっかり活力を失くしたウェイブが、涙目で席に戻ったとき、バタン！と一際大きな音が鳴り響いてドアが開き、

「帝都警備隊所属、セリユー・ユビキタス！アンドコロです！」

足元に小さな生物―犬に近い―を連れた少女と、彼女に手を握られた青年が入ってきた。

ニコニコと屈託なく笑うセリユーは、今のウェイブにとつてまともな人間に見えるが、しかし。ウェイブは話しかけには行かない。

見えているからだ、セリユーの後ろ手に握られた花束が。

案の定、セリユーは薔薇の花束を宙に放り投げて花びらの絨毯を作り上げるといふ、奇行に走る。

「第一印象に気を遣う。……それがスタイリッシュな男のタシナミ」
花びらが舞い散る中、頬に手を当てて、歩いてきたのは白衣の男性。

ウェイブと目が合うと、彼は片目を瞑り投げキッス。男色の気があり
そうな彼に、不幸なことにも気に入られてしまったらしい。

取り敢えず、一連の騒動から逃げるようにウェイブの隣に腰を下ろ
した青年に声をかける。

「よお、俺はウェイブだ。よろしくな」

「ああ」

・・・ウェイブの挨拶に返ってきたのはたったの二文字。いくらコ
ミュニケーション能力に欠けた者だろうと、名乗られたら名乗り返す
くらいの事はしてもおかしくないだろう。それとも帝都ではこれが
当たり前なのか。流石帝都。

そんなワケあるか。

「あーっと、君の名前は？」

「——ミラルド。ミラルド・ユビキタス」

涼しげを通り越して、冷ややかな瞳にウェイブが映る。

見惚れる、というか人間味のない、彫刻のように無機質な美しさを
持つ男だ。『カツコイイ』ではなく、『綺麗』。

感情が乏しいこともあり、それは綺麗から不気味にジョブチェンジ
してしまっているが。

しかし、どうにも会話が続かない。そもそも、会話が成立している
かすら疑問だ。実際、二人の間で起こっているのは会話のキャッチ
ボールではなく、ドッチボールに近い。ウェイブが投げ、ミラルドが
避ける。

当然ウェイブにもいずれ限界というものが来る。

そうすると、二人に訪れるのはただ一つ。

『沈黙』である。

「おや、私が最後のようですね」

そんな中、最後の一人が扉を開けた。

穏やかな声に俯きかけていた顔を上げたウェイブは、ドア付近に目
を向け、疲れきった声で挨拶をする。

「・・・ウェイブだ。よろしくな・・・」

「ランです。こちらこそ、宜しくお願いします」

「!!」

厳ついマスクを被っていないければ、お菓子を食べ続けている訳でもない。花束なんて持っていないし、勿論オカマでもない。その上、自ら名前を教えてください。

最後に常識人きたつ、と思わず立ち上がってランの腕を掴んで、涙をふいた。初対面であるランからしたら、ひたすら不思議でしかない。

——そんなウェイブは自身が、ランから変人のレッテルをつけられていることには気づかなかった。

狩人達

『人は見かけによらぬもの』という慣用句がある。

古くから伝わることわざであり、人の性格や能力は見かけで判断することが出来ない、そんな意味だ。

ウェイブはこの究極が、先程の拷問官のような大男、ボルスだと思
う。

ランが入室してから程なくして、ボルスが全員分のお茶を入れて
やって来た。コトン、とウェイブの前にも湯のみを置いた彼は、お盆
を胸で抱いて謝罪した。

一番最初から部屋にいたというのに、ウェイブに一言も声をかけな
かったこと。自分は人見知りで、初対面の人間と話すことが苦手なこ
と。・・・とても人見知りとは思えない外見ではあるが。

そして、彼の名前と焼却部隊に所属していたことを聞いた。焼却部
隊、というのはエスデス軍と同じくらい良い噂を聞かないが、ウェイ
ブは彼は善良な人間だと思う。しかしながら、見かけは本当に恐ろし
いことこの上ない。

和気あいあいというにはまだお互いに遠慮があるが、それでもほの
ぼのと会話をしていると、再び扉が開く音がする。敵意があるような
乱暴な開け方に、室内が静まり返り、コツコツとヒールの音を鳴らせ
て、仮面をつけた女性が入ってきた。

呼び出された帝具使いは七人だと聞いている。室内にいるのは既
に七人。ならば、この女性はなんだろうか。

(・・・あれで、バレないと思っっているのか)

約一名、ミラルドを除いて全員が困惑に吞まれた。

足首まで伸ばされた青髪に、白い軍服。間違いなくエスデスだろ
う。

今日初めて会う彼らはともかく、付き合っって数年のミラルドをあれ
で騙せると思ったのか。それとも端からミラルドのことを騙すつも

りがいいのか。

事前に少し遊んでみる、とは聞いていたので彼は女性の正体がエスデスだと言うような愚は犯さず、視線を逸らす。

「お前達、見ない顔だ！ここで何をしている!!」

「おいおい、俺達はここに集合しろって・・・」

反論しかけたウェイブが問答無用で蹴り飛ばされる。咄嗟に胸の前で両手をクロスしてガードをしていたが、ガードごと吹っ飛ばされてしまう。帝国から直々に命令がきた以上、ウェイブの戦闘能力が低いとは考えにくいので、きつと油断していたのだろう。

まさか本気で蹴ってないだろうな、とミラルドは取り敢えずウェイブの様子を見に行く。完全に伸びていたが、命に別状はあるまい。

「賊には殺し屋もいる、常に警戒をおこたるな！」

アツサリと気絶したウェイブにエスデスは不満気に言い、次は近くにいたランへ襲いかかる。

突き刺すように、長い足の蹴りが炸裂した。当たれば痛いどころでは済まないだろうそれを、ランは受け流して距離をとる。下手に彼女に攻撃するよりかは、よっぽど正しい選択だ。

——そして、ここで正しい選択を選べないのがミラルドの妹、セリユー・ユビキタスである。

彼女は所有する帝具『ヘカトンケイル』ことコロと二人がかりで背後から飛びかかった。

ミラルドは思わず頭を抱えたくなる。殺気が剥き出しすぎるし、今を見て彼女と自分の実力差すら測れないのか。相変わらず、頭は残念な状態らしい。

予想通り、殺気で気がついたエスデスは振り返ることすらせずに口を叩き落とし、セリユーの腕を掴んで背負い投げをしようとする。セリユーの顔に驚きの色がうかんだ。まさか、バレるとは思っていなかったらしく、床に叩きつけられる衝撃に思わず目を瞑った。

「――」

が、途中でエスデスの手首に鋭い衝撃が走りセリユーから手を離してしまう。結果、セリユーに来るべき痛みはやって来るのではなく、一瞬の浮遊感の後、柔らかに抱きとめられた。

片手でエスデスから解放されたセリユーを抱えているミラルドが、彼女の手首を下から蹴り上げたのだと分かるのにそう時間はかからない。

空中で体勢を立て直したミラルドは、くるくると身体の捻りを使つて、蹴る、回し蹴り、蹴る、回し蹴りを繰り返す。両手が塞がっているので少々攻撃が単調になつてしまふが、風を切り裂くように繰り返される蹴りの連打は常人ならば目で追えない速さだ。

もつとも、目の前の女は常人ではないが。

「……うぶ。お、お兄ちゃん酔っちゃう……」

「……悪い」

そこで、セリユーからSOSの声が上がる。

エスデスとミラルドはともかく、セリユーは抱かれたままグルグル飛び回つたのだ。目も回るだろう。

ミラルドはエスデスの肩を踏み台にして、身体をバネのように使い、大きく後ろへ跳躍。

入れ替わりに黒髪の少女、『クロメ』が隙の出来たエスデスに襲いかかり、抜き身の日本刀で器用に彼女の仮面だけを割つた。エスデスもそれが自分の命を脅かすものではないと悟り、敢えて避けない。

「——それが帝具『八房』か……。流星の切れ味だな」

パキパキと、仮面に入ったひびが広がって、彼女の白皙が露わになる。

離れた場所で様子を窺っていたボルスが、驚きの声をあげた。正体はやはり、帝国最強の女将軍。

「エ、エスデス将軍!!」

「………いってーえ」

タイミング良く、ウェイブが目を覚ます。軽く頭を振りながら身体を起こした彼は、目の前で満足げに笑う上司が戦闘狂……。もとい変人なことを理解し。

「転職、したいな」

三日間天日干しされた大根のようにしわしわになって、乾いた笑みをこぼしたのだった。

「さっきの趣向は驚いたか？普通に歓迎してもつまらんとってな」

一通り挨拶が済み、事態の收拾がついてからエスデスが放った言葉だ。

実際楽しかったのは彼女一人で、それ以外・・・特にミラルドはセリユーが怪我するかと思いい、気が気じゃなかった。アレだけで大袈裟だ、とセリユーは笑ったが、久しぶりに会った妹の両腕が無くなる、なんて体験をしたミラルドが多少神経質になるのは仕方の無い事だろう。

人目を気にせず、兄妹とは思えないイチヤイチヤつぷりを見せつけるミラルドとセリユーは非常に目に毒で、居心地が悪そうにウエイブはエスデスに向き直る。

「それで、エスデス將軍。言われるままに着替えましたけど・・・これから何を？」

「ああ。まずは陛下と謁見、その後パーティーといったところだな」
「い、いきなり陛下と!?!」

エスデスの答えに、ウエイブがぎよつ、と目を剥く。

黒のスーツを着せられた時点で、格式張った場所へ行くのかとは思っていたが、帝国の頂点と謁見というのは流石に予想外だったようだ。

緊張により、声と表情を強張らせるウエイブに、エスデスは「面倒事はちやっちょと済ませるに限る」と、取り合わない。

「それより、エスデス様。アタシ達のチーム名とか決まっているのでしょうか？」

こちらは、緊張とは程遠い様子スタイリッシュが、ちやつかりエ

スデスを様付けしつつ、首を傾げる。

エスデスはそれに、一つ頷いて獣のように獰猛な笑みをうかべる。

「我々は独自の機動性を持ち、凶悪な賊の群れを容赦なく狩る組織……故に——」

——特殊警察、『イエーガーズ』だ。

帝具使いのみの部隊の結成、それは千年続いた帝国でも異例の事態だった。

それが、何を示しているのか。血に塗られた未来には何が映るのか。

——少なくとも幸せで洋々たる未来でないことは、簡単に想像が出来た。

■ ■ ■

特にこれといった問題も起こらず、陛下との謁見も順調に進んだ。といっても、大体の受け答えはエスデスやミラルドがしたので、緊張もそれほどなかった。

あれだけしっかりと話せるなら、ウェイブとの会話の時ももう少し自主性を持つてほしかったが、相手がまさか帝国の副将軍と知ってしまつた以上ろくな事は言えない。

やはり、帝国には変わり者しかいないらしい。

そんなこんなで現在。

「あつ、ウェイブくん。ハウレン草は一番最後。すぐにしなつとなつちやうからね」

隣で野菜を切っていたボルスが鍋の前に立つウェイブに注意する。場所はイエーガーズに与えられた詰所の厨房。

謁見後は親睦会も兼ねて、ウェイブの持参した海産物を中心に食事をすることになったのだ。根が庶民的なウェイブは、宮殿で出るような豪華な食事より、自炊の方が落ち着いていいのだが——、

(料理出来るメンツがおかしいんじゃないか!?)

厨房に立つのはウェイブとボルス、そしてミラルドという男三人だった。右でボルスが野菜を切り、左でミラルドが魚を捌く。間に挟まれてウェイブが海鮮鍋の味付けを担当。

せっかく家庭的男子として、女子軍のポイントアップを試みているというのに、これでは何の意味も無い。

「でもその、ミラルド……さんが料理出来るのはちよつと意外ですね」「……?どうした、いきなり」

つい先程までは、ため口に呼び捨てだったのに今は敬語になっているウェイブにミラルドは不思議そうにする。

不思議そう、とは言ってもそれは言葉だけで、表情は相変わらずの無表情。何かに怒っているとかではなく、彼にとってはこれがデフォルトなのだ。

「いやさつきはその、エスデス軍の副将軍だったとは知らなくて……」「まあ、別に好きなように呼べばいい」

本人がこう言うので、結局さん付けたため口という微妙な形で、落ち着く事になる。ちなみにミラルドは料理に限らず、家事全般が得意だ。

料理が得意なことに関しては、昔からセリユーが料理すると何でも暗黒物質へ変えてしまう、素敵な才能をお持ちであることが大きい。

三人とも手慣れていたこともあり、それからさほど時間がかからずに調理が終わる。メインはウェイブの海鮮鍋、サイドメニューでミラルドとボルスが作った料理の数々。家庭料理にしては及第点といったところだろう。

調理中は成人していないクロメを除いて、食前酒を楽しんでいたらしい。クロメは炭酸の果物ジュースで飲んだ気になっている。

セリユーは童顔な故、勘違いされやすいが既に成人していて酒も飲めるシタバコだって吸える。しかし彼女はどちらとも手をつけたことが無い。

結論から言うならば、作り終えた料理を運ぶ頃には――、セリユーはしっかりと出来上がっていた。

「・・・飲ませたのか」

「・・・まさか、ここまで弱いとは思っていないくて」

赤い顔をして自分の胴体に引っ付くセリユーを見て、ミラルドは眉を寄せる。

クロメが語るるところによると、ミラルドに禁止されて酒を口にすることが無いと不満そうだったセリユーに、ほろ酔い気味のスタイリッシュとエスデスで、ランが止めるのも聞かずに飲ませたという。

今まで酒を禁止していた事が裏目に出たか、とミラルドがため息をついていると背中に回ったセリユーの手にペしペしと叩かれた。

「おにいちゃんはあ、せりゅーいがいのひととお話しちゃダメですう」

「・・・セリユー、一度離れてくれ」

「うみゅ・・・やだあ。もつとお、もつとぎゅーってしてえ」

「・・・これはもうダメだな」

会話が通じないセリユーを抱き上げる。膝の裏と背中に手を回した、所謂お姫様抱っこだ。

こうなってしまうたらもう家に連れて帰り、一刻も早く寝かせるしかない。そう思つての事だったのだが、どうやらセリユーはこの体勢が甚く気に入ったようで、ふにやふにやと顔を緩めて笑う。

「・・・帰る」

「食事は？」

「いらない」

これ以上無防備なセリユーを他人に見せる訳にはいかない、兄としての心配だ。酔ったセリユーはいつもの五割増くらいのレベルで可愛い。

ミラルドはセリユーの身体を、それはそれは大事に抱えて家に帰る。幸い、帝都内にある二人の自宅は宮殿からも近く、歩きで十数分といったところだ。

結局、親睦会をほっぽり出して二人は帰宅する羽目になったのだっ

た。

「——俺はシャワ浴びてくるから、セリユーはその間に着替えてベッドに入っている」

「うー」

「・・・聞いてるか？」

家に着くと、迷わず二階の寝室に上がってセリユーをベッドの上を下ろす。

何とか眠らないように、何度も目を擦っているセリユーだが、出来ればそんな事はせずにさっさと眠ってほしい。さっきから「うー」やら「みゆう」しか返事してないが、本当に理解しているのだろうか。

ミラルドはセリユーの髪を軽く撫でてから、自分の着替えを持って一階の浴室へ向かう。今から湯を張るのは流石に面倒なので、シャワーを浴びるだけだ。

熱い湯を浴びて、ミラルドはそういえば今日一日動きっぱなしだったと思い出した。だが、別段疲れているという訳でもない。きっとセリユーが側に居るからだ。

セリユーは熱い湯が苦手なので、明日の朝彼女がシャワーを浴びることを想定して、事前に温度を下げしておく。

なんて、無意識のうちにセリユーのことを考えているあたり自分でも相当末期だなと思う。が、周りに言わせれば今更な話だ。

「・・・何してるんだ」

そんなこんなで濡れた髪を拭きながら浴室から出ると、ドアの前にセリユーがべったりとくっついていた。

ミラルドは思わず二度見してしまう。予想外も予想外。

よく見れば服も着替えていない。まさかとは思うが、自分がシャワーを浴びている間、ずっとここで待っていたのだろうか。呆れて叱る気にもなれない。

「・・・」

セリユーは火照った顔でふらふらと頭を左右に揺らし、無言でミラルドに向かつて両腕を伸ばした。抱っこ、のポーズだ。仕方なしにセリユーの両脇に腕をいれて、抱き上げる。

「・・・満足か」

こくこく、と頷く気配がするので、セリユーを抱いたまま階段を上り、再び寝室に入った。数分前と同じように、丁寧にベッドに下ろす。今度こそ着替えさせようと、タンスから適当に出した寝巻きを彼女の膝にのせて部屋から出る。・・・つもりだったのだが、セリユーはミラルドの袖を引っ張り自分に注意を引くと、両手を天に向かつて突き上げた。バンザイ、のポーズだ。

つまりは、着替えさせろということだろう。

「・・・じつとしていろ」

どこまでも妹に弱い彼のこと、断れるはずも無くセリユーの軍服を脱がせ始めた。

ワンピース型になっているそれは、ベルトとボタンを外してしまえば前は殆ど露出してしまい、当然のように上下セットの下着もすっかり見える。フリルのついた白い下着は彼女らしい。

恐らくセリユーはここまで考慮していないんだろうな、と考えながら今度は寝巻きに着替えさせた。薄桃色のネグリジエに着替えたセリユーをベッドに寝かせて、布団を掛ける。

ちなみにこの兄妹、当たり前のように毎晩同じベッドで寝ているのだ。

本日も例によってミラルドがセリユーの横に寝転がって、セリユーが一ミリの隙間も作らず抱きつき、ミラルドがセリユーを抱きしめる。いつも通り。

これがユビキタス兄妹の日常だ。

——兄妹の域を超えている、そう注意する者はこの家にはいない。・・・注意したところで聞かないだろうが。

初任務の内容は

「……ん」

カーテン越しに伝わる太陽の光を受けて、セリユーは特に何の予兆も無く目を覚ました。

目覚めて一番にまず、すぐ側にある兄の身体をぺたぺたと触る。半ば日課と化しているそれは、いわばセリユーの精神安定剤だ。掌から伝わる熱にひどく安心感を覚える。

元から眠りが浅い方のミラルドは、そうしてセリユーが起きて僅かに動き出すだけで目を覚ました。

「……おはよう」

「おはようっ、お兄ちゃん」

セリユーは相変わらず、朝から元気いっぱいだ。昨日の酒で二日酔い、なんてことにはならなかったらしい。

目を擦りながら、ゆっくりミラルドは身体を起こした。

彼に続いてセリユーも起きて、枕元の時計に目をやる。

「まだちよつと早いね。……あつ、でもお兄ちゃん。二度寝はしちやダメだよ」

「セリユーに睨られたから、もうしない」

学校の先生のように注意するセリユーに、ミラルドはゆるゆると首を振る。

正義を名乗るセリユーは、寝坊や夜更かし、勿論二度寝も許さない。ミラルドはよくセリユーに叩き起されたものだ。正義の味方は兄に對しても厳しい。

しかし、起きるには少々早い時間だろう。二人は僅かに悩んだ後、早起きは良い事と結論つけて起きることにした。

「うふふ。なんかお兄ちゃんと一緒にお仕事って、変な感じだね」

「まあ」

「嬉しいなあ」

甘えるように肩に頭を乗せてくるセリユーを、軽く撫でてからシャワーを浴びるよう促す。

言われてから、セリユーはそう言えば昨日は風呂に入った記憶がないと思ひ出す。そもそも昨日の記憶が殆どない。最後に覚えているのは、やたらと上機嫌なスタイリッシュとエスデスに酒を飲まされたところで――。

(あれ?じゃあ私何で着替えてるんだろう・・・?)

内心首を傾げて、昨夜の記憶を辿る。しかし、どうにもこうにも自分で着替えた記憶はない。そしてセリユーは意識が朦朧としたなか、自らの力で着替えられる自信はない。

となると、誰かに着替えさせられたのか。考えられるのは、セリユーの寝巻きの場所を知っていて、尚且つセリユーを着替えさせれる状況――つまりひとつ屋根の下で暮らしている人物。

・・・一人しかいない。

「昨日ってあの・・・私その」

しどろもどろになり、目をあちらこちらに泳がせながら自分のネグリジェと兄を見比べた。

聡明なミラルドはそれでセリユーの言わんとすることを悟ったのか、サラリと、

「何も覚えていないのか」

「・・・え、じゃあ着替えは」

「俺にやれと、お前が言ったんだがな」

正確には言った、というか行動で示したと言うべきか。何にせよ、ぼんやりとしているセリユーの許可を取らずに、ミラルドが勝手に服を脱がせたと思われたら、たまったものじゃない。一応、ミラルドが進んで行動したのではないと明言しておくことも忘れない。

しかし、よくよく考えてみると年頃の娘の着替えをいくら兄だとはいえ、男が手伝うのは良くなかったかもしれない。その証拠にセリユーは、愛らしい顔を怒りで赤くしている。顔から火が出そう、という表現もあながち間違っていないだろう。

ミラルドはそれが憤怒ではなく、羞恥なことに気づかない。そして、気づかないままセリユーの羞恥をおいて話は進んでいく。「悪かった。考えが足りていなかった」

頼まれてやった事だという弁解も出来るが、セリユーは言い訳を嫌う。セリユーを怒らせてしまったら、とにかく潔く素直な心で謝ることが大切である。優しい妹はこれで許してくれるだろう。

許してくれなかったら、もうそれまでだ。自ら首を掻っ切つて死を迎えるまで。嫌われたら確実に生きていけない自信がある。

なんて、妹を怒らせただけでここまで重たいことを考えるのが、ミラルドという狂人だ。しかもその妹は怒っているのではなく、ただ恥ずかしがっているだけだというのだから、もはや救いようがない。

兄の頭の中がスプラッタになっているとは知らず、セリユーは慌てて首をふり『ミラルドは悪くない』という内容を伝える。

「べっ、別に怒ってるんじゃないんだよ？えと、それに昨日のは完全に私の自業自得だと思うし・・・私は、その、お兄ちゃんなら・・・、嫌じゃないし・・・」

どうせならもっと大人っぽい下着を着けていれば良かったか、なんて考えるがこれは心の中に留めておいた。

最後のほうは、声が小さくなつてミラルドの耳には届かなかつたが、何にせよセリユーは無意識のうちに兄の自害を阻止することに成功したのである。これが妹ばわあ。

頬を赤く染めて琥珀色の瞳を潤ませつつ、チラチラと自分の様子を伺うセリユーに、ミラルドは遅れて妹が怒っていないことを理解し、一安心。

ちなみにだが、ミラルドが死ぬとセリユーは正義の心やら何やら全てを忘れて、後追い自殺をするため結果的に彼女は自分と兄の二人の命を救ったこととなった。

「・・・遅れるとエスデスに怒られるな。朝食作っておくから、早く着替えて支度してこい」

まだベットの所で、百面相をしてアワアワしているセリユーに声を掛けてから彼はカーテンを開ける。眩しいが、これぐらいが目が覚めて丁度いいのだ。

頬を赤らめながら、逃げるように着替えを抱えて浴室へ行ってし

まったセリユーに、少々心を痛めつつミラルドも一階へ向かい、朝食の準備をする。

朝は洋食、夜は和食。昼はその日の気分による。

これは、ユビキタス家の暗黙の了解である。本日もいつも通り、朝食は小洒落たカフェで出るような洋食だ。

献立は、野菜とローストビーフが挟まれたライ麦パンのサンドイッチに、具沢山のミネストローネ。黄金色をしたふわふわのスフレオムレツ、それからヨーグルトサラダ。栄養バランスまでしっかり考えられ、その上見栄えの良いメニューだ。

自分一人ならばここまで凝った料理はしないだろうが、セリユーが居るならば話は別。ミラルドは料理が好きなのではなく、妹の為に尽くすのが好きなのである。

これをセリユーのシャワータイムを終えるまでに作り、尚且つスープを沸かしている間には自分の身支度もしているというのだから、器用なものだ。そんなじよそこらの主婦にも劣らないだろう。

ちようど、ミラルドがスープを器によそっているときにセリユーが浴室から出てきた。

「……わ、美味しそう」

二人分のランチョンマットの上に、綺麗に食器に盛られた朝食を見て、セリユーは呟いた。料理からでる湯気と共に鼻孔をくすぐる温かい匂いに、頬が緩むのを感じる。

セリユーの言葉にミラルドは満足そうに、僅かに表情を柔らかくした。他人から見れば特に変化のない無表情だが、これが兄なりの笑顔だ。それを知っているのは世界中探し歩いても自分だけだろう、そう思うとセリユーは言葉に出来ないような幸せな気持ちになる。

二人揃っての朝食は意外に珍しい。何だかんだ言って二人共——特にミラルドが忙しく、のんびり食事している暇が無かったのだ。

食べ終わると食器を片付けて、セリユーをソファアームに座らせた。ミラルドはセリユーの髪の毛をタオルで丁寧に乾かしてから、後頭部の

高い位置で一つにくくる。

そこまでやってくれなくても、とセリユーはいつも言うが、妹の世話焼きはミラルドの唯一の趣味なのだ。

特に慌ただしくすることもなく、少しだけ早めに家を出てイエーガーズの詰所を目指す。

「おはようございますっ」

中に入ると、ミラルドとセリユーを除いたメンバーが既に揃っていた。集合時間の十分前だったので、遅れたということはないのだが。

ペコリと頭を下げ、相変わらず元気ハツラツなセリユーに、エスデスはひらりと片手を上げて答えた。

「ん、おはよう。これで全員揃ったな」

今日がイエーガーズとしての初出勤だからか、はたまた隣にミラルドが居るからか、セリユーは鼻息を荒くして気合いは充分。しかし、エスデスの言葉はセリユーの想像の斜め上をいくものだった。

「暇つぶ……、おほん。五日後、帝具の適応者探しに武芸会を開催する」

机に積み上げられた紙の束を、その白い手でバチンと叩いて――、

「――最初の仕事はビラ配りだ」

帝国最強の恋愛事情

——武芸試合当日。イエーガーズの名を広める為におこなったと言っても過言ではない、先日のピラ配りのおかげで、参加者はそこそこな数がいた。エスデス主催、ということもあって、エスデスや彼女の部下のミラルドを一目見ようと集まった者もいるだろう。

司会進行はランとウェイブの外音が良い組が交互に担当している。今は丁度ウェイブの番らしい。

見かけだけならミラルドのほうが花がある、とウェイブは主張したのだが、エスデスの「こいつがニコニコ愛想良く笑えると思っているのか」という一言によりあえなく撃沈。セリユーが司会を担当する案も出たが、むさ苦しい男どもの中に可愛い妹を放り込むなんてことはミラルドが許さず、彼の大反対で結局ランとウェイブの二人になったのだ。

残りのメンバーはというと、受付や会場整備などを担当し、それが終わると自由行動になっている。スタイリツシユは自分が所有する研究室に閉じこもり、ボルスは家族サービスに自宅へ帰って、クロメは帝都の甘味巡り、そしてミラルドとセリユーの二人は見物客として都民に紛れて会場に入っていた。

「うーん……。あんまり強い人いないねー」
「まあ、元から期待もしていないだろう」

もきゅもきゅと両手に抱えたポップコーンを幸せそうに頬張りながら、セリユーは言う。

一応表向きはただの武芸試合だが、その実態はミラルドが回収した帝具『スペックテッド』の適合者探しである。帝具を使用するにはある程度の実力は必要ということで、こうして各々の戦闘力を見ているわけだが、特別目立った者はいない。ちなみにこの武芸試合の裏の裏の実態はエスデスの恋人探し、という極めて不純なものだったりする。

この程度の戦いでは、セリユーが退屈なのではと思いきりミラルドは横目で彼女を見るが、案外楽しそうな顔をしていたので良しとした。セ

リユーにとっては武芸試合云々ではなく、兄とデートしているという事実が嬉しいのだ。

「あ、もう次で最後だよ」

入り口で配布される対戦表をパラパラ捲ると、二十組中十九組の試合が終了しているので、次の試合で最後。各組の勝者に賞金が配られる仕組みである。エスデス軍に入団して長いミラルドにとってははした金だが、一般市民にとってはそれでも喉から手が出るほど欲しいものだろう。

「・・・金は必要だしな。分からなくもない」

ポツリとセリユーに聞こえないような大ききで呟く。

横にいたセリユーが不思議そうに首を傾げるが、彼は何も言わずに妹の口についたポップコーンのカスを拭う。セリユーは知らなくもいい事だ。これは、彼の意地でもある。

彼女が煮え切らない様子で目を瞬いていると、両サイドの入り口から選手が見えて、ウェイブの凛々しい声がマイク越しに響いた。

『東方、肉屋カルビ！西方、鍛冶屋タツミ！』

方や筋骨隆々とした大柄な男。被り物なのか何なのか、頭部だけ牛のようで、首から上だけ見ると正直人間かどうかとも怪しい。

方やまだ成長途中と言える小柄な少年。鍛えられていることは分かる身体だが、それでもこの武芸試合には不釣り合いに幼い。恐らくは、参加者の中で誰よりも。

「あの子大丈夫かなあ。怪我とか、しないといいけど・・・」

「怪我に関しては自己責任だろう。・・・それに、多分問題ない。——弱くはない」

少年——タツミを案じていると、横でミラルドが静かに言う。え？、とセリユーがミラルドに聞き返す間もなく試合が始まった。

先に仕掛けたのは、大柄な男——肉屋のカルビ。振りかぶった拳をタツミに叩きつけようと強く一步を踏み出す。一般人にしては洗練されたその動きは、彼が選手の中でもトップクラスの實力者である証だ。

しかし、タツミは焦ることなく斜め後ろに向かって跳躍し、アツサ

りとそれをかわす。結果、カルビの拳はタツミに触れることなく、ただ地面を無駄に砕くだけに終わった。初めの一撃だけで、片がつくと思っていたカルビの顔に驚きが浮かぶ。

「っ、な」

僅かに出来たその隙をタツミが見逃すはずもなく、空中で体勢を変えて、振り向きざまに蹴りを打ち込む。

咄嗟に胸の前で手をクロスさせ、威力を殺したカルビだが、それでも大きく後ろへ下がらされた。彼の巨体がアツサリと吹き飛ばされる様子到会場の皆が一様に驚きの声を上げる。

「クソッ」

悔しげに毒づき、間合いを一気に詰めたカルビは、タツミに向かって突きの連撃。自分より頭三つ分は背の高いカルビの攻撃に、しかしタツミは怯えることなく、至極冷静に拳をいなしていった。

攻撃し、受け流される。この繰り返しに、遂に痺れを切らしたカルビが一際力を込めた拳を放つ。

タツミはそれを待っていたと言わんばかりに、拳を振りかぶったことにより、空いたカルビの腹に重い一撃。更に、流れるような動きで、カルビの側頭部に向けくると回転の力をプラスした回し蹴り。

鈍い音が聞こえて、一白遅れてからカルビの巨躯が地面に沈んだ。立ち上がって一際大きな声援を送る観客に、タツミは少しだけ照れくさそうに無邪気に歯を見せて笑い、ガッツポーズ。

「あ、あの子強いね・・・」

「相手が弱いのもあると思うが」

唾然とした様子で零すセリユーに、ミラルドは大して表情を変えず平常運転。

しかしミラルドもセリユーと同様、彼の実力には驚いた。それが顔に出ないだけで。

武闘の経験でもあるのか。彼の実力は、おおよそ普通に暮らしている身につくレベルではない。何よりミラルドが気になったのは、彼の実戦に対しての落ち着きようだ。

あの若さで、油断や慢心をしている訳でもなく、あそこまで実戦に

対して冷静なのは、少し異常だ。ミラルドやエスデスのように死線にくぐり抜けてきた者ならともかく、彼の職業は鍛冶屋。仮に危険種や猛獣相手と戦い続けていたとしても、獣と人では話が違う。

それほどまでに、ミラルドの目から見てもタツミは戦い慣れしていると言えた。

(・・・要注意、といったところだな)

——そしてそれは、ミラルドにとって警戒に値する。

あれほどの實力を見せたのだから、帝具使い候補はタツミで決定だろう。となると彼はイエーガーズの一員、未来の同僚になる可能性がある。

セリユーは自分が悪と見なした者以外には、本当に警戒心が働かないので、妹の分もミラルドが注意する必要がある。

妹の為に彼がする事はただ一つ。怪しい素振りを見せたら、斬って捨てればいい。簡単な話だ。

「・・・お兄ちゃん?」

「ああ、なんだ」

「もうっ、聞いてなかったでしょ。だから、隊長がリングに下りてきたんだけど・・・。あんな予定あったっけ?」

自分の服の袖をくいくいと引っ張るセリユーの視線の先を追うと、いつの間にかVIP席からリングへやって来たエスデスが、タツミと言葉を交わしている。司会のウェイブも動きが止まっているし、観客もざわついている。

は?、とミラルドも訝しげに琥珀色の目を細め、上司の意図を探ろうとして、彼女の頬が僅かに赤く染まっていることに気がついた。

——そう、さながら恋する乙女のように。

ミラルドは先日の彼女の言葉を思い出した。エスデスはこう言っていたはずだ。

『恋がしたい』と。

「おいまさか」

そのまさかだ、とでも言うようにエスデスは懐から金属製の首輪を取り出し——流れる動作でタツミの首につけた。

突然のことに驚き、暴れるタツミをエスデスは微笑みながら、首元に手刀。鮮やかに気絶させる。

そのままズルズルと荷物よろしくタツミを引きずって、その場を後にした。

——鍛冶屋の少年、本職は暗殺集団『ナイトレイド』のタツミは、幸か不幸か帝国最強の女将軍に惚れられてしまったらしい。

■ ——— 完全に油断していた。

武芸試合に出場したはずが、気がつくまで鎖で椅子に雁字搦めにされていたタツミは、硬い椅子の上で居心地が悪そうに何度も尻の位置を替え、そう内心で呟いた。

同僚のラバツクに勧められ、故郷への仕送り額を増やすためにも、悪くない。そんなふうにして武芸試合に参加したはずが、気づいたら帝国最強の女に気に入られ、敵の本拠地を置くのである宮殿へ連れてこられるなんてどういうドッキリだ。

自分ではなくとも、動揺するし、警戒していたところであの場でどう逃げろと。

「という訳で、イエーガーズの補欠……、そして私の恋の相手となったタツミだ」

どういう訳だ、と心の中でタツミは呟いた。自分が気絶している間に、イエーガーズのメンバーは全員集合してしまい、もはや逃亡など不可能。

「隊長、市民をそのまま連れてきちゃったんですか……？」

「案ずるな。暮らしに不自由はさせない」

「……鍛冶屋を営んでいるんじゃないのか。そこはどうする」

ボルスの質問にアツサリと答えたエスデスに、ミラルドが追撃を仕掛ける。

しかし、これにもエスデスは迷うことなく瞬時に答えた。

「イエーガーズで働くんだ。辞めればいいだろう」

何を当たり前のことを、と鼻で笑う姿は女王そのものだ。自分が良ければそれでよし、まさにそれである。

「相変わらず自己中心の塊だな、エスデス。自分のことしか考えていない」

「へえ？ 珍しく、中々愉快なことを言うな。自分とセリユーのことしか考えていない、ミラルド」

静かに言い合う二人から、いち早くウェイブが距離をとり遅れてボルスやランも逃げ始めた。まさかここでおっ始めることはないと思うが、相手は狂犬集団のトゥトップだ。何を仕出かすか分からない。

が、二人の一触即発の雰囲気はセリユーが窘めるように、ミラルドの手を引いたことと、タツミが言い難そうに言葉を発したことにより壊れる。

「あ、あのー・・・お取り込み中のところ悪いんですけど、俺は宮仕えする気は全然ないというか・・・」

自身なさげに小さく手を挙げたタツミを顎でしゃくり、「こう言ってるが」とミラルドが言う。

エスデスはミラルドを意図的に無視し、口元に笑みを浮かべた。

「ふふっ。言いなりにならないところも、染め甲斐があるな」

いや、人の話聞けよ。帰してくれって言ってるんだよ。

そう思うが、そんなことを言ったらタツミの身の安全が本格的に保証されなくなるので、大人しく口を閉じる。触らぬ神に祟りなしだ。

「ふむ。それじゃあまず、タツミに皆の実力を見せたいところだが・・・」

話を無視されながらも、どうにか逃げようとしているタツミがあまりにも哀れだったので、ランが首輪だけでも外すように促した。

エスデスはタツミの首輪を慣れた手つきで外し、顎に手を当てた。そうそう都合よく仕事はやって来ないし、もういつその事一人ずつ組み手でもさせて見るか、なんて考えていると慌ただしくドアが開き、エスデスの前で止まるとビシッと敬礼。

「どうやら、都合よく仕事が出来て来たらしい。」

「エスデス様！ご命令にあったギョガン湖周辺の調査が終わりました！」

「・・・そうか。タイミングがいいな」

エスデスは口の端を釣り上げて獰猛に笑い、部下から丸まった地図を受け取った。それをテーブルの上に広げると、顔を上げて、満足そうにイエーガーズの皆と目を合わせる。視線から何かを悟り、全員の表情がそれまでとは一転して真剣味を帯びる。

「——お前達、初の大きな仕事だ」

その変わりように、タツミは思わず息を飲んだ。しかし、考えようによつては、この状況は非常に好機。

イエーガーズの一人一人の戦闘力や、未だ未知数のミラルドの実力を知れるチャンス。イエーガーズの帝具の情報を掴み、何としてでもナイトレイドのアジトに持ち帰る、それが今タツミのすべき最善の行動だ。

情熱は大切だ。しかし、熱いだけでは生き残れない。タツミの尊敬する彼はそう言っていた。決して焦つてはいけない。自分はヒョッコとはいえ、暗殺者なのだから。

「タツミ、お前も着いてくるんだぞ。よく聞いておけ」

お前に皆の実力を見せることが目的なのだから、と付け加えるエスデスにタツミは心中でガツツポーズ。計画通り、という訳ではないが、都合のいい方に話が転がった。

タツミはその事を顔に出さないよう注意し、驚きと緊張が混じった未熟な少年・・・を、演じた。

「最近、ギョガン湖に山賊の砦が出来たのは知っているな」

「もちろんです。・・・帝都近郊における悪人達の駆け込み寺・・・苦々しく思っていました」

ギリ、と音が聞こえるほど歯ぎしりをするセリユー。

悪の代名詞とも言える賊達の溜まり場だ。一刻も早く根絶やしにしたいと思っていたが、帝具使用であっても、警備隊・・・それも下っ端だったセリユーにそんな権限はない。

それを、ようやく殲滅する機会を手に入れたのだ。これがどうして笑わないでいられるだろうか。

「あはっ、あははっ。……悪を、やっと悪を殺せる。綺麗に出来る。正義を執行出来るんだ……！お兄ちゃん、見ててね。私凄く強くなっただんだからっ」

「無理しない程度に頑張ってくれば、それでいい」

ミラルドは胸の前で小さな拳を固めて、気合十分なセリユートの頭を撫でる。一人で突っ走りがちなセリユートは、色々心配なことが多い。無理するな、と言つてもどうせ聞かないだろうから、無理させる状況に追い込まなければいいのだ。

暗に、躊躇いなく殺せる発言をするセリユートにエスデスはどこか嬉しそうに笑い、対照的にタツミやウェイブは顔を引き攣らせる。

「出陣する前に聞いておこう。一人数十人は倒して貰うぞ。これからこんな仕事ばかりだ。きちんと覚悟は出来ているな？」

エスデスら地図上のギョガン湖付近をぐしやり、と握り潰す動作をした。『倒す』なんて生ぬるい言い方をしたが、ようは大量殺人の覚悟があるかを聞いているのだ。セリユートやミラルドの行動原理は、もう分かっている。セリユートはそれが悪だと思えば、躊躇いなく……むしろ嬉々として行うだろう。ミラルドは妹がそれを是とすれば、悪だろうが善だろうが、殺すことも、もつと酷いことでもしてみせる。

一番最初に、答えたのはボルスだった。

「私は、軍人です。命令に従うまでです。このお仕事だって……誰かが、やらなくちゃいけない事だから」

覆面の上からでも分かる、暗い雰囲気を見せたボルスだが、それでも戦う覚悟はあるのだろう。エスデスはそう判断した。

「同じく……ただ命令を肅々と実行するのみ。今までも、ずっとそうだった」

次いでクロメが自身の帝具、八房を撫で静かに答えた。言葉は短い、そこにはミラルドと同じように感情の乏しい彼女なりの覚悟が見えた。

「……俺は、大恩人が海軍にいるんです。その人にどうすれば恩返し

出来るか聞いたたら、国の為に頑張って働いてくれればそれでいいって……。だから、俺やります！もちろん命だつてかける!!」

今回の招集に答えたのもそれが原因だろう。

エスデスが一番殺せる覚悟を疑っていたのがウエイブである。帝国の闇を知って心優しい彼がどう出るか分からないが、この分だと寝返るようなことはないはずだ。

「私はとある願いを叶えるために、どんどん出世していきたいんですよ。その為には、手柄を立ててはいけません。こう見えて……やる気に満ち溢れていますよ」

手に持っていた本をパタンと閉じて、ランは怪しい笑みを浮かべた。エスデスのように絶対的な覇気を纏っている訳でもないのに、何かタツミは背筋が寒くなる。

野心を堂々と語るその姿は、エスデスにとって好感が持てる。そこまで聞いて、まだ黙ったまま我関せずを貫いているスタイリッシュな声をかけた。

「ドクターはどうだ？」

「フツ、アタシの行動原理はいたってシンプル。それはスタイリッシュの追求!!……お分かりですね？」

「いや分からん」

胸に手を当てて、キラリと目を光らせるスタイリッシュなエスデスはバツサリ切り捨てる。

元より彼のことは、自分やミラルドとは方向が違えど、同じ狂人だと思っていたので、そこまで心配してはいない。

彼は意気揚々と続きを語りだが、いつ終わるか分からないのでエスデスは「もういいぞ」と話を止めた。

「ともあれ、皆迷いがなくて大変結構」

スライディングの体勢に移ろうとしていたスタイリッシュなエスデスを放置して、エスデスは帽子を目深に被り直した。

「——それでは出撃！」

「・・・着きましたね」

「あら、結構素敵な場所に住んでるのね。スタイリッシュじゃない」
タツミと二人で観戦と洒落こんだエスデス達を除いた七人はそびえ立つ砦、そして目の前に広がる長い階段を前に馬から降りた。階段も馬で登れないこともないが、自分の足で歩いたほうが圧倒的に早いし、そもそもこのメンバーだと戦闘になると馬が邪魔になる者のほうが多いからだ。

作戦は既に道中に決めた。正々堂々、正面突破。セリユーが提案した作戦とすら言えないものだが、山賊程度正面から戦って勝てなければ、特殊警察なんて名乗れない。反対の声は聞こえなかった。

皆落ち着いた様子で階段を登っていると、上から仮面でくぐもった男の声が聞こえる。仲間を呼んでいるらしい。

「敵だ！皆集まれ!!」

その瞬間、正門からバタバタと音を立てて各々の武器を持って数十人の男が出てくる。

「おいお前たち、ここがどこだか知ってて来てんのかあ!?!」

「正面からとはいいい度胸じゃねえか!!」

「生きて帰れると思うなよ!!?!」

威勢よく罵声を浴びせる男達の後ろで震えている者たちがいるのは、ミラルドの軍服がエスデス軍のものだと分かっているからだろうか。

何れにせよ皆殺しには変わりないか、と考えていたミラルドの脳内が、次の瞬間真っ赤に染まった。

「うっはーっ、可愛い女の子もいるじゃねえか。・・・たまらねえな。連れ帰って楽しもうぜえ」

セリユーのことを言っていたのか、クロメのことを言っていたのか。

か、あるいはその両方か。いや、挑発のつもりかもしれない。
どちらにせよ、男の言葉はミラルドの逆鱗に触れるには充分過ぎた。

連れ帰って、楽しむ？何を？誰が？

セリユード、俺のセリユード何を考えているというんだ、この男は。山賊風情が、凶に乗るなよ。

——どうやら、余程死にたいらしい。

「俺の妹を、汚い目で見るなよ」

鮮血の花が咲いて、男達は断末魔を挙げる時間すら与えられずに事切れた。

「っ、何が起こったんだ・・・」

離れた崖に腰をかけて、目を凝らして彼らの様子を見ていたタツミは、突然のことに目を見張った。

山賊が下衆な顔で数言話したかと思えば、次の瞬間にはいつの間にか虚空から取り出した、金の太剣を持ったミラルドを中心にして男達が倒れふしていたのだ。あの出血では恐らく、命がある者はいまい。たったの数秒で数十人の成人男性を屠った彼の速さは、もしかするとあのアカメよりも速いかもしれない。

(アレが、帝国の副将軍かよ・・・っ！)

血溜まりにいるミラルドが、一瞬こちらを見た気がしてタツミはぶるりと身体を震わせた。

カタカタと震える手を無理やり押さえつけるタツミに、エスデスが疑問符を浮かべる。

「どうした？タツミ」

「・・・あ、いや、何でもないです・・・」

ビビってる場合じゃない、そう自分を奮い立たせて、彼らの様子に目を向ける。ミラルドが斬り殺したおかげで開いた門へ、いつもの義手ではなく大砲を腕に付けたセリユーが穴を開けた。広がった道をセリユーとクロメの二人が我先にと中へ滑り込み、遅れてウェイブやミラルドも突入する。

残ったラン、スタイリツシュ、ボルスで中から逃げ出した者を片付けているようだ。

しかし残念な事にランやボルス以外、ろくに帝具の能力を使わないため、情報も中々集まらない。

ミラルドやクロメは帝具を使っているのだろうが、能力は使用していないし、ウェイブに至っては体術で片付けてしまうので、帝具の形状すら分からない。

そうこうしているうちに、イエーガーズが攻め入ってからあつという間に砦は地獄絵図と化した。逃げ惑う人やら、痛みに転げ回る人やらで、まさに阿鼻叫喚。

「すげえ・・・」

「タツミ。お前は、私が育てる。これくらい出来るようになるぞ」

エスデスは座っていた岩から立ち上がり、長い髪を後ろへはらった。

正直、ナイトレイドの皆から聞いていたイメージとは大分違う。もっと凶悪な人を想像していたが、会ってみれば部下にも優しくかったしタツミ自身にはもっと優しい。

これは革命軍側に勘違いがあるのではないだろうか。自分に好意を抱いているのなら、もしかすると、案外話し合えば革命軍に引き込めるかもしれない。そうすれば、戦力はぐっと上がるし、逆に味方の被害は大幅に減る。

そしてあのエスデスの説得が可能なら、きつとミラルドだって分かってくれるかもしれない。

話し合いの余地があるかもしれないのに、ただ殺し合うなんて愚の骨頂。

今までのことを反省し、新国家誕生に尽力してくれればいい。

(俺はやる。やるぞ……！必ずこの人達を説得してみせる……!!)

そんなふうに誓い、拳を小さく天に突き上げた。ナイトレイドの皆が驚き、そしてタツミを賞賛する様子が今から想像出来る様だった。

——暗殺者として未熟なタツミは、まだ知らなかった。エスデスやミラルドが、どれほど手遅れな狂人なのかを。

激情のカルボナーラ

「——あの、ミラルドさん」

「なんだ」

「・・・俺・・・今日一日ずっとこの状態なんすか」

「部屋の中なら好きに行動していいと言ったはずだが」

「・・・いやこの部屋で何をしろと」

宮殿にあるイエーガーズの会議室で、タツミは目を泳がせながら小さく呟いた。冷たいうえに硬い椅子は非常に居心地が悪いが、それ以上この広い部屋に無愛想な彼と二人きりということが居心地が悪い。

タツミの斜め前に座ったミラルドは彼の呟きを聞き、報告書に羽ペンを走らせる手を一度止めて、何を思ったかタツミに分厚い本を二冊ほど押し付ける。

「暇なら読め」

ミラルドはそう一言告げてから、また報告書に目を落とした。わざわざ紙袋に入っていたあたり、彼なりに気を使ってタツミの暇つぶしように持ってきてくれたのだろうか。

タツミは体を動かすことが好きなので読書は得意ではないが、それより何もしないでジツとしている方が嫌いだ。大人しく本に手を伸ばして恐る恐るページをめくる。

——そして数分とたたずに勢いよく本を閉じて、ミラルドに突き返した。

「なんだ」

「・・・っこれ、そっ・・・そういう本なんすか」

「そういう、とは？」

タツミには少々桃色の表現が多いように思えた。御年十六歳のタツミからするとまだ手を出せない表現で埋め尽くされてる。

対照的に御年二十三歳のミラルドはタツミから突き返された本をパラパラとめくり、至極冷静に「ああ」と納得したように呟いた。

「官能小説だな」

「ミラルドさんがそういうの好きなのは……その、意外というか……」
「いや、俺も今初めて読んだ。これは借り物だ」

誰から、とは恐ろしくて聞けなかった。

ちなみに本当のところ、これは随分前にノウケン將軍から「これでお前も女に興味を持って」と渡されたものだ。渡されてから読んだことは一度も無かったが、ノウケンの性格からしてまともな本ではないと踏んでいたのでセリユーの目に届かないように保管していた。

「あの、今思っただんですけど」

「ああ」

「俺の昼飯とかって、その……」

ノウケンが異民族討伐から帰ってきたら返すか、なんて考えながら本を紙袋に戻しているとタツミがそう声をかけてきた。何故彼はミラルドと話す時だけビクビクしているのか。ミラルドはエスデス軍きつての温厚派で有名だというのに。

——ぎゅるるる

……と、そこでタツミの腹が盛大に自己主張してくる。朝食はしっかりと食べたが、タツミは食べ盛りの男子。二時過ぎまで我慢はしてみたが、いい加減限界だった。

セリユーがこの場に居れば昼びつたりと昼食が出てくるだろうが、ミラルドは基本一人だと朝夜に携帯食糧しか食べない。人呼んで『エスデス軍の残飯処理隊長』。

空気が凍った。タツミは俯いて固まり、ミラルドはペンを置いて眉を寄せる。

「……外に出すことは出来ない。エスデスの命令だ」

一気にタツミの表情が絶望に染まる。

自分は敵の本陣で餓死をするのか。何とも愚かだ。田舎で待つている皆よ、先逝く不幸をお許しください。

涙を流して空を仰いだタツミを白けた目で見て、ミラルドは静かに立ち上がった。

面倒だが、今日一日ワガママ上司のお陰でミラルドはタツミのお目

付け役兼お世話係なのだ。

「俺が作ったものでいいなら、食わせてやる」

「!!」

全力で頷きながらタツミは何故こんなことになったか、今朝の自分に思いを馳せた。

（——なんでこんなことになったんだっけなあ・・・）

■ ■ ■

時は半日遡り。

イエーガーズ初任務の後は各自宮殿や帝都にある自宅へ帰り、明日は早速ではあるが休みとなった。

というのも、どうやらエスデスが大臣にイエーガーズ各メンバーの報告とタツミという恋の相手が見つかったことを伝えに行くらしい。なら、自分もいない事だし初の大仕事をこなした皆を休ませてやろうという、エスデスの気遣いだ。セリユーはもつと悪を倒したい、と不満気だったが。

だが、ここで問題になるのがタツミだ。

タツミはそもそもエスデスと恋仲になることに対して乗り気じゃない。誰もいない会議室にポツンと残したら、十中八九脱走するだろう。宮殿内には数々に罠が仕掛けてあるため脱出は不可能だろうが、その罠にかかってタツミが死んでいても困る。

そこでタツミの監視役として置かれたのが、家事万能系副將軍ミラルドだ。

当初は、なら私も残る、とセリユーも会議室に居るはずだったのだが、ミラルドの説得によりクロメと二人でウインドウショッピングという結果になった。イエーガーズには女性が二人だけなんだから仲良くしておけ、という兄らしい考えだ。

そうして、朝からエスデスが帰ってくるまでずっと広い会議室にミラルドとふたりきりという奇妙な状態になってしまった。



「・・・うまい」

ミラルドの作ったカルボナーラを口いっぱい頬張りながら、タツミは目を輝かせた。ガツガツと皿からもものすごい速さでパスタがなくなっていく。ここまできると作り手冥利に尽きるというものだが、「うまい」と絶賛するタツミに対してミラルドは「そうか」の一言しか言わない。

あつという間に完食。カラン、とフォークを置いて満足そうに腹をさするタツミは、ようやく書き終えた報告書をまとめるミラルドを見て、はたと首を傾げた。

「ミラルドさんは何も食べないんすか」

「俺は朝食べた」

「いやそれは関係ないだろ・・・」

朝食と昼食は別物なのだから、何の理由にもなっていないんだが。一瞬そう思うが、本人が言うならそれでいいのだろう。きっとミラルドは少食なのだ。

腹も満たせた事だし、エスデスが帰ってくるまでおそらくあと数時間。さて何をして時間を潰そうか。

いつそ昼寝でもするか。・・・でも敵の本陣で堂々と寝るのもな・・・いやもうミラルドの作った飯を食った時点で敵もクソも無いような・・・。

うんうん唸りながら葛藤していると、ふと、頭に名案が浮かんだ。(・・・ひよつとして、今がこの人を説得するチャンスか?)

昨日は結局、夜も遅かったからエスデスを説得する暇もなく問答無用で抱き枕にされて寝てしまった。彼女には今夜言うとして、ミラルドには今が絶好のチャンスだろう。室内には他に人はいない。今言わずしていつ言うのだ。

「あの一ミラルドさん！」

「なんだ」

彼も報告書を書き終えていた。きつと今なら話を聞いてくれる。今日一日ミラルドと接して思ったが、彼は感情を他人に分かりやすく表現することが苦手なだけで、きつと根は善良な人間だ。

「——ミラルドさんは、なんで帝国で働いてるんすか」

「・・・それはお前が何故鍛冶屋で働いてるのかと聞くのと、同じ事だろう」

ミラルドは突然の質問に驚いた素振りも見せず、僅かに口を閉ざした後アツサリと言った。

「俺にはそれくらいしか出来なくて、それが一番手っ取り早いからだ。大した理由なんて無い」

給料が多いしな、とミラルドは小さく付け足した。

きつと彼もそう易易と語れるような、幸せな生い立ちをしていないのだろう。むしろ、今の帝国は幸せな者を探す方が難しい。

タツミは悩む。ナイトレイド所属ということは教えられないが、ミラルドを革命軍に寝返らせるには、安易な嘘では意味がない。ならば、真実を全てではなく、少しだけ話せばいい。

「・・・俺には、幼馴染みが二人いたんです。大事な奴らで、すごい奴らでした」

サヨにイエヤス。二人共掛け替えのない友人だった。でも、彼らを説明するにはその全てが過去形になる。二人はもうこの世にいない。サヨはくだらない理由で拷問の果てに命尽き果て、イエヤスは猛毒に身を侵され。

——タツミが駆けつけた時には、もう全てが遅くて。

「二人共、死にました。アイツらなんも、なんもしてねえのに。顔も知らなかったような貴族に、苦しめられて、殺されたんです」

鼻の奥がツンとして視界がぼやけてくる。だって、ずっと一緒だと思っていたのに。こんな、最期も看取れずに。

ぐしぐしと涙に濡れる目を拭って、せめてこの気持ちかミラルドの心に届くように——、

「——だから何なんだ？」

届く、ように——。

「……は？」

「だから何なんだ、と言った。お前はそれを俺に言っただけをどうしてほしいんだ？」

馬鹿にしていたり、タツミを煽っている訳でもない。彼は本当に分からないという顔で、タツミは口から間拔けな音がでるのを感じた。

「何なんだって……」

「お前の幼馴染みは、俺の幼馴染みじゃないぞ」

そんなことは分かっている。今度はタツミが困惑する番だった。彼が何を言っているのか、タツミはまったくわからない。

「お前の大切な人間が死んだ話に、俺は興味がない」

タツミは膝の上で思わず拳を握った。喜び、ではない。

タツミはどこかで期待していたのだ。ミラルドは本当は帝国に仕えているのが嫌で、でも逃げ出せずに副将軍なんて位置についているのだと。だが、違った。彼はおそらく——何も考えていない。民のこととはもちろん、革命軍や帝国についても。

タツミは悲しみがひいて、逆に別の感情が渦巻くのを感じた。

エスデス軍が何をしてきたか、ミラルドが何をしてきたか。彼が居なければ生きていた命が、どれだけあったか。それだけ殺して何をするのうとこの男は抜かしている。

「——お前のツ、お前のせいで！何人死んだか、分かっているのかあ!!」

溜め込んだ感情が爆発して、タツミはミラルドの胸倉を掴んでいた。掴んだことよって乱れた彼の襟から白磁のような肌が見える。

タツミは今ここに自分の剣が無いことに、心底安心した。きつと腰に吊るしていたら、自分は彼に斬りかかっていたらどうから。

「騒ぐな、やかましい」

その気になれば無理やりタツミの手を離させることも出来るだろうが、ミラルドはそれを実行しようとはせず、なすがままで。

タツミは暗殺者として、未熟だ。それは自分が一番分かっている。事実、敵の言葉でこうも簡単に冷静さをなくし、激情する。

だからこそ、彼は気がついていなかった。

——会議室のドアが開いたことに。

カチリ、冷たい金属がタツミの後頭部に当てられた。悪寒がずるずる身体に絡みつき、熱くなった頭が一気に冷えていく。

「——セリユー。大丈夫だから、何もしなくていい」

「……どうして」

「殺したら、エスデスに叱られるぞ」

一拍おいて、冷たい感覚が離れる。同時にミラルドの手がタツミの手首を掴み無理やり引き剥がされた。

襟を直しながら立ち上がったミラルドは、タツミには目もくれずに、可愛らしい私服とミスマッチなトンファアのような銃を握った妹に歩み寄った。

ぽふぽふと頭を撫でられながら、セリユーはタツミを睨みつけた。

「次、同じことしたら悪と見なして処分します」

——結局、その日エスデスが帰ってくるまでタツミは一度も口を開かなかった。



「……私、あの子嫌い」

あれから程なくして、エスデスが戻ってきて無事ミラルドの監視役は終わりを迎えた。

家に着いて、ソファアに腰を下ろしたミラルドが夕飯のメニューを考えていると、隣に膝を抱えて座ったセリユーがいきなりそう言った。

「ここで何故、と聞くほどミラルドも鈍くはない。自分のことを心配していたのだろう。それくらいは分かっていた。」

「あの子・・・タツミくんは殴ろうとしてたよ。お兄ちゃんのこと」
「知ってる」

「・・・どうして、タツミくんはあんなに怒ってたの」

「俺の言葉が気に入らなかつたらしい」

「・・・どうして、何もしなかつたの」

「止める価値を感じなかつた」

怒りでフルフルと震えるセリユーをミラルドは後ろから抱きしめて自分の方へ引き寄せた。

セリユーはミラルドの腕の中でもぞもぞと位置を変えて、ちょうど彼と対面するように膝の上に横座りする。

「お兄ちゃんが私のことを心配してくれるのと同じくらい、私もお兄ちゃんのこと心配してるんだよ」

「分かってる」

「うそ、分かかってないもん」

口元を尖らせてミラルドの胸に擦り寄る。ミラルドは腕に収まる小柄な妹を見て、より強く抱きしめた。

「俺は、セリユーの方が心配だが」

「どこが？」

「・・・男はみんな狼さんだつて、昔教えただろう」

パチパチと目を瞬いてから、セリユーはふつと吹き出して笑った。予想の斜め上をいく答えだったのだ。

「ふふ。じゃあ、その理論だとお兄ちゃんも狼さんなの？」

「ああ」

耳元にかかるミラルドの吐息がくすぐったくて、何とも言い難い甘美な疼きが身体を支配する。

「——お前を守る狼さんだ」

ああ、この感情はなんて言うんだろう。

行き過ぎたシスコン野郎

——基本、エスデスといるとろくなことが無い。これはもう数年の付き合いによりミラルドは理解していた。とは言え、それを自らの意思で回避できるかと言えば、別にそんなことは無い。少なくとも彼女が上司で、彼が部下である以上それは覆しようがなかった。

今回も例によって我儘上司に休日出勤を強いられ、挙句それが上司の想い人と偶然見つけた賊を逃がした同僚の尻拭いだと言うのだから、もはや文句すら出ない。仕方なしにミラルドとセリユーはせっかくの休日だというのに、人探しに山を駆けずり回るはめになったのだった。

「……本当に申し訳ありませんでした。このウェイブ、山よりも高く海よりも深く反省しております……」

下着一枚までひん剥かれた上、重石を膝に乗せて正座するウェイブを、山狩りから帰ってきたミラルドは扉に寄りかかりながら見つめていた。『石抱き』なんて随分古風なことをするものだ、と思うと同時にあのエスデスにしては珍しく甘い拷問だとも思っている。彼女はジワジワ攻めることが好きなことなド変態だが、それにしたって優しすぎる。もつとも、耐性のないウェイブには効果抜群だろうけれど。

辺境でのんびり優しく育てられたウェイブにエスデスの遊び相手は少々荷が重い。せっかく手に入れた部下——それも希少な帝具使いだ、流石の氷の女王といえどある程度の気は使ってやるらしい。あくまで使い物になるうちは、だが。

エスデスは髪をかきあげてやけに冷氣たつぷりの溜め息をつくとき、「……ウェイブはもういい。あと鞭打ちと水責め程度で終わらせてやる。ミラルド、見つかったか？」

「いや」

「セリユーの方もか？」

「・・・すみません」

エスデスは、二人の答えを聞いてがっくりと肩を落とした。ようやく見つけた理想の恋人をみすみす逃がしたショックと、尻尾を掴みかけた正体不明の暗殺集団——ナイトレイドを逃がした失望が半分半分だろうか。セリユーやミラルドと同じようにスタイリツシユも自らの強化兵とともに捜索しているようだが、連絡が入っていないのだから望み薄だろう。

「それで、隊長。先程のお話ではタツミくんは反乱軍に入る可能性がある・・・そうおっしゃってましたね」

「——なっ!?!」

エスデスの背後に控えていたランがスルリと口を挟み、それにセリユーが大きく反応した。どうやらセリユーとミラルド以外、先に部屋にいたメンバーは拷問を受けていたウェイブも含めて全員既に聞いていた話らしい。

昨日の取り乱し様といい真っ当に正義感の強そうなタツミだ、考えられないことではないだろう。

「そんな、それが分かっていたなら何故放置していたのですか!?!危険分子になりうる存在なら、生かしておく必要なんて・・・むぐっ、んー!!」

琥珀色の瞳をギラつかせて鼻息荒くセリユーがエスデスに詰め寄ろうとする。昨日のことをまだ引きずっているのだろうか、とミラルドは小さく息を吐いてセリユーの手を引いた。それから悪がどうのこうの言い出した妹の口を手で抑えて、しっかりと腕に閉じ込める。

もごもごとセリユーが苦しそうにするので、少し手の力を緩めると途端に騒ぎ出した。

「ぶはっ・・・悪と分かっているながら生かしておいたなんて・・・隊長、そんなのおかしいです!」

「まだ反乱軍に通じていると決まったわけじゃない。将来的に可能性があるだけだ」

エスデスが言いながら、然も面倒くさそうに視線をミラルドに寄せた。落ち着かせろ、という事だろう。

「セリユー。いい子だから、あまり困らせないでくれ」

「お、お兄ちゃんは私が間違ってるっていうの？」

「そんなことは言っていない。俺はセリユーの可愛い声でそんな物騒な話を聞きたくないだけだ。兄ちゃんの言う事聞けるか？」

「………ん」

ええ……、とクロメとウェイブが同時に呆けたように溜め息をついた。あんなに血走った目で騒いでいたセリユーを一瞬で可愛い妹に戻したミラルドの手腕に脱帽である。

ミラルドが不満気に膨らんでいたセリユーの頬をつつくと、彼女は子供扱いするなど怒り。何だかんだいいつもぎゅつと手を握ってくる愛らしい妹を空いている手であやす様に撫でて、ミラルドは話を続けた。

「……セリユーは見ての通りだ。仮にタツミが敵として現れたとしても、生け捕りは出来ない。その場で殺してしまうだろう」

「私も帝具の性能的に生け捕りは難しいかもしれませんが……」

「いや、それで構わん。タツミの事はまだ好きだが……、優先すべきは部下の命だ。勿論生け捕りが好ましいが、いざとなれば生死は問わん」

ミラルドはまだしもセリユーが生け捕りなんて器用な真似出来るはずがない。そう言うと続いてボルスもおおずと口を出す。心情的には兎も角、確かに彼の帝具『ルビカンテ』は捕獲には不向きであろう。残りのメンバーはどうだか分からないが、暗殺部隊所属であった以上クロメも捕獲には慣れていないはずだ。生け捕りは正直言って現実的ではない。

エスデスも充分それを理解していた。故に生け捕りを強制するよくな事はしない。彼女はサディストをこじらせすぎた変態だが、決して部下を使い捨てるような外道ではないのだ。

「まあ、全て可能性の話だ。何も無ければそれに越したことはないが、警戒は怠るなよ。……では解散」



同時刻。

「——以上が、俺が見てきたイエーガーズの戦力だ」

帝国最強の想い人——絶賛噂されているタツミはというと、アカメとラバツクの助けの元無事ナイトレイドのアジトへ戻ってきていた。意図せずパイ活動をしたことになったタツミの情報は、非常に有益なものだっただろう。有益なもの、なのだが——。

「てか、アンタ大丈夫なの？今の話だと完全にあのとち狂った男に喧嘩売ったっぽいけど」

「・・・う」

問題はエスデス軍のナンバー2、そしてナイトレイドの暗殺対象候補筆頭であるミラルドにタツミが突っかかった事だ。流星にあれだけでナイトレイドとバレルことはないとは思いますが、彼の機嫌を損ねて後々タツミが危険に晒されることも考えられなくはない。

半眼で指摘するマインにタツミは言葉を詰まらせた。大丈夫か大丈夫でないか言ったら、あまり大丈夫ではない。しかし、あの場では頭に血が上ってしまったってそれどころではなかったのだ。

すると元帝国軍所属であったラバツクが首を振り、冷静に否定した。

「いや、でもたぶん問題はないと思う。少なくとも、それでタツミがミラルドから目のかたきにされることは無いはずだ。どっちかって言うところ・・・ヤバイのはシェーレさんだ」

「私、ですか？」

すみれ色の長髪を揺らして自分を指さすシェーレに、ラバツクは一つ頷いて続けた。

「アレは行き過ぎたシスコン野郎だ。レオーネさん以外は見たことあるだろ、セリユー・ユビキタス。あの妹に対する執着は尋常じゃないし、同時にどんなに小さな事だろうと妹を傷つけた相手に対する憎悪

も尋常じゃあない。セリユ一の両腕を斬り飛ばしたシエーレさんなんて、真っ先に狙われるに決まってる」

「わあ、それは困りましたね。気をつけないと」

「あれ結構軽いね!？」

真面目に話した俺が馬鹿みたいじゃん、と騒ぎ立てるラバックにくすくすとシエーレは笑った。

「怖くないと言ったらそれは嘘になりますけど……でも逆にチャンスだと思えますよ」

「チャンス？」

「……そうだな、シエーレの言う通りだ。ミラルドの一番厄介な所はあの冷静な思考だろう。シエーレの存在がアレの冷静さを奪えるなら、それは大きなチャンスと言える」

目を丸くして聞き返したタツミに、アカメも同調する。勿論彼自身の戦力も非常に厄介なものだが、冷静沈着というのはそれだけで大きな力となる。戦闘中も冷静でいられるというのは言うほど簡単ではない。

例えばタツミ、イエーガーズではセリユ一やウェイブだろうか。三人は挑発に乗ったり熱くなったりしてしまう典型的な情熱タイプだ。逆にアカメやミラルドは、くぐり抜けてきた修羅場の数も関係しているのだろうが、危険な状態であればあるほど落ち着いて思慮深く行動する人間だ。普段の様子からは想像出来ないがラバックもそうだろう。

故に彼を少しでも動揺させることさえ出来れば、勝率は上がるのだ。

「それは確かにその通りだと思うけど……アイツの帝具の能力は？副将軍なんて呼ばれるくらいだし、持つてるんだろ？」

タツミの話では分からないとの事だったから、期待できるのは帝国軍に所属していて、エスデス軍とも多少なりとも関わりがあったラバックだ。酒瓶を手で弄びながらレオーネはラバックに視線を向けた。

その視線を受けたラバックは、ふうと息をついて話し始めた。

「名は、千劍格納『クラーウイス』。能力は――」

幸せな牢獄

Dr. スタイリツシュが消えた。

この知らせはミラルドにとって、タツミが逃げたということより大きな問題だった。

非戦闘員ではあるものの、彼の持つ帝具は医療用と全帝具の中でも極めて稀有である上、なんとたつてセリユーが気に入っている人間だ。タツミを欲している人間はエスデスだが、今回スタイリツシュが消えて悲しむのはミラルドの妹である。繰り返すようだが、可愛い妹である。

故にミラルドを動かす理由が異なるため、彼のやる気にスイッチが入るのも至極当然の事だった。

エスデスとセリユー。ミラルドにとってこの差は大きい。

しかしながら、ここ数日危険種の背に乗りスタイリツシュ探しに東奔西走する彼に現実は無優しくなかった。彼の姿は見つからないし、情報もない。加えて、彼の強化兵は地下からごっそり消えていた。

交戦し、殺された。そう考えるのが妥当である。

無駄足だったという倦怠感。反面良かった、とほんの少しだけそう思った。

これで、セリユーが二度と人体実験なんて馬鹿なことに手を出さなくなるからだ。そもそも、スタイリツシュの手でセリユーが人体実験を行うことが出来たのはあくまでそのコネがあつたからだ。そしてそのコネは既にナイトレイドによって殺されている。

もちろんセリユーが悲しむことは、ミラルドにとって生きてままだ内臓を引きずり出されることよりずっと痛い。けれど、それ以上にスタイリツシュという人間は彼にとって不快な存在だった。医療目的であろうと、セリユー自身が望んだことであろうと。スタイリツシュはセリユーの体にメスを入れたのだから。

生きていても構わないけれど、死んでいるならそれはそれで都合が

良い。軍人としては失くすに惜しい人材だと思うが、一個人としては特にこれといった感情を抱くことは無かった。

懸念があるとすれば、セリユーがスタイリツシユの死に嘆き、より一層危なっかしい行動をしださないかだが——それを止めるのが兄であるミラルドの役目だ。



父は正義の味方だと、そう教えてくれたのは兄だった。

いつの事だったか。仕事で家を空けてばかりの父は自分のことが嫌いなのかと、そう聞いた時に言われたのだ。

正義の味方だから忙しいけれど、本当にセリユーが困っている時には何時でも助けに来てくれると。

兄があまりにも上手に話すものだから、当時の自分はその答えに満足して父のように正義の味方になりたいと思ったのだ。

だけど、結局いくらセリユーが困っても寂しがっても父が助けに来てくれることはなくて。

学校に迎えに来てくれるのは兄で。ご飯を作ってくれるのも兄で。近所の男の子にからかわれた時に助けてくれるのも、誕生日にぬいぐるみしてくれるのも、寂しい時に抱きしめてくれるのも、全て兄だった。

父は正義の味方だと、そう教えてくれたのは兄だった。

——けれど、セリユーの正義の味方はいっだってミラルドだけだった。

「……………」

目に映る天井がいつもと違う。ゆっくり浮上していく意識で、ここがイエーガーズの宿舎であることに気がついた。

傍にはセリユーが眠る前と変わらず長椅子に座っているミラルドがいて、セリユーは思わず安堵のため息をついた。

装いが先程と違うから、セリユーが眠りについてからまたスタイリッシュを探しに出かけていたのかもしれない。それでもセリユーが目覚ますときにはしっかりと傍にいるのだから、兄らしいと思う。

部屋にたった一つだけある時計に目を向ければ、最後に見た時より短い針が二つほど進んでいた。寝すぎたからか、少しだけ頭痛がする。

帝都警備隊員であったころの上司オーガ、両腕を失くした自分に戦術を与えてくれたスタイリッシュ。

立て続けに知人を亡くしたセリユーは、少し休んだ方が良いと言いつけられ宿舎で仮眠をとっていたのだ。

「……お兄ちゃん、ドクターは……」

諦めたつもりだった。これだけ探してもスタイリッシュの手がかりは出てこないし、地下の強化兵たちがいないことは彼が交戦した何よりの証拠。生きているのであれば何かしら連絡を寄越してくるのが普通だ。それが無いということは、想像出来るのは死の一択だった。

だけど、まだ諦めきれない気持ちが顔に出ていたのかもしれない。

ミラルドは何か言おうと口を開きかけ、結局何も言わずにただ首を横に振った。

「……そう」

自分でも驚くほど低い声でた。

悔しいのか、悲しいのか、怒っているのか、或いはその全てか。自分で自分の感情が分からなかった。ただフツフツと腹の底から湧き上がるような感情のままに、セリユーは温度を感じる事がなくなった両手をきつく握りしめる。

そうして暫くすると、鉄の義手がミラルドの手で包まれた。ミラルドの両手がゆっくりと固く結んだセリユーの指を解いていく。

いつの間にかベッドの近くまで来ていた兄は、自分の前で跪くように片膝をつけてしゃがみ込んだ。

「悲しいか」

自分と同じ琥珀色の瞳が真っ直ぐに見つめてきて、セリユーは俯いた。

悲しい、というのは間違いではない。もちろん悲しいし、それを上回る悔しさがある。スタイリッシュを殺した賊が恨めしい。

だけど何より、

「悲しい……けど、でも違う。——怖いの」

悲しい、悔しい、怒りもある。黒い感情が心を渦巻いているのは確かだった。

だけど、その全てを押しえつけるような底知れない不安があった。

「お父さんも、オーガ隊長も、ドクターも、み、みんな死んじゃったでしょ」

どうしてか声が震えて、途切れ途切れ言葉を紡ぐセリユーの話をミラルドは辛抱強く聞いた。

「……お兄ちゃんも、どこか行っちゃわないか、怖い」

つまりは、そういう事だった。

自信が無さそうに、徐々に声が小さくなったセリユーの声は、しか

し兄にはしつかり届いていた。ミラルドはどんなに小さな声だろうと、セリユートの声は、セリユートの言葉だけは聞き逃さないから。

いつも通り妹の言葉を脳に刻みつけたミラルドは、セリユートの義手を緩く包んでいた両手を離して、

「――俺は死なない」

ゆつくりとセリユートに言い聞かせるように言った。

さほど大きくはないその声は、自然とセリユートの耳に入って、そしてたった一言で底知れない不安を払いセリユートの気持ちを静めた。

安心したかった、安心させて欲しかったのだ。この不安をミラルドに払って欲しかった。他でもない、彼の言葉で。

「セリユートが俺に生きていてほしいと願ううちは、死なない」

じゃあセリユートが死んでほしいと願ったら死ぬのか、そう聞こうとしてやめた。ミラルドの答えは分かりきっているし、そもそもセリユートがそんなふうと思う日は永遠にやってこないのだから。

問いかける代わりに手を伸ばして、お返しと言わんばかりに今度はセリユートが鉄の義手でミラルドの両手を包んだ。否、包んだというよりは、ミラルドの両手首をセリユートが握りしめた、に近い。妹の奇行に目を瞬くミラルドにセリユートは悪戯っぽく子供のように笑って言った。

「逮捕」

キチキチと義手の部品が擦れて音がなるくらいキツく握りしめられていても、ミラルドは眉一つ動かさなかった。どころか、セリユートの手を解こうともせず握られた両手首を目を落として小さく呟いた。

「・・・俺は囚人か」

「そう。だからお兄ちゃんは一生私の檻から出られません」

「随分愛らしい看守だ。幸せな牢獄だな」

怖い看守だもん、と『愛らしい』という部分に反応して頬を赤く染めてセリユートは視線を逸らした。

それでもセリユートの手には変わらず、ミラルドの手首に赤く跡が付

くほど強い力が込められていた。

セリユーがこんなふうにも暴走するのは、さほど珍しいことでもない。昔から精神が不安定な時はこうしてやたらとミラルドを束縛したがるのだ。治し方は簡単で。ただミラルドが寄り添って傍にいてやればいい。

おいで、とミラルドが声をかければセリユーは嬉嬉として肩に擦り寄ってきた。仕草がどうにも犬っぽくて、ミラルドは珍しくほんの少しだけ笑ってしまう。もちろん本人には言わない。

レアな兄の笑みが嬉しかったようで、満足そうに微笑んだセリユーはミラルドの耳元に口を寄せた。やや擦ったいけれど、動かぬが吉と判断したミラルドは自分の膝に身を乗り出してきたセリユーを支えることに徹する。

そうしてミラルドの耳に噛み付くような距離で、セリユーは勿体ぶるように口を開いた。

「——離さないから。絶対離さないから、離さないでね」

そう囁くセリユーの瞳はどこまでも濁っているけれど、その瞳に宿るのはただ純粹な愛だった。